

が腕を切れた時の武者修行の武士の前髪の二才で在たが今の話しの塩梅で其野郎
 は相違なし、處るで親方頼みがある願を俺ちよ加勢して其野郎を撃せて下せへ一生
 涯の不具者よ、爲れた遺恨を晴その今此時だト云せも果す市平忽地兩眼を見はり
 假令手前の頼みねへでも、實の先刻アノ野郎が己を捕へて盗人だと散々云した
 から其返報を爲すよ置れぬ幸はひナ事アノ野郎、今夜の廊内泊つて居ゆる何と
 も云はず今つから出かけて行て撃て殺やう、ソレ野郎とも準備をしる急げト急
 立たる意外の騒ぎよ手下の者とも周章狼狽心得たりと名々身輕に打扮つ、長脇指を
 佩さみ杯せる、用意東の間は整のひしかバ市平更は指圖して兩三人を船に遺し其餘
 の手下金太を始め十四五人の人数を卒ひて殘らぬ小舟に取乗つ、忽地よ上陸して番
 場を指て走り行しと、斯る事と夢も知らぬ民駒吉お大等の宵の話しの容子を
 を聞んと泊りよ來りし三吉諸とも萬城が噂さよ夜を深して、半介が歸り來るを今か
 くと待ところへ家の後る俄然騒立、衆多の人の足音して火事だ火事だと云ふ聲



是るより駒吉三吉おとるき立て裏口の戸を推開けバ火を放られたる物と見え羽目も
 庇も一面は猛火炎々と凄まじく折から北風烈をければ瞬たく問は燃あがりし、事の
 騒ぎの是のみならず誰と知らず衆多の者ども火烟の中より現れ出つ、咄と叫ん
 で前後の雨戸を打破り、勢はひ烈しく亂入して紙戸障子の嫌ひなく打毀しつ、荒
 れ廻り果て悪黨兩三人が逃て驚るくお民を捕へて軽々と引搦ぎ何處ともなく逃行た
 るよぞ、駒吉大ひは驚ろき怒りて承塵は掛たる處口を搔取あへず前後より撃て蒐り
 し敵は當り一生懸命滅多うち、大童と成て闘かへとも衆寡の勢はひ敵し難さ一旦
 この場を脱んと思ひ敵の腦骨打碎さて二人三人打殺し「奈も爲て姉のお民を、取
 返さんと戸外へ出るるとき埋伏けたる市平が邪見の刃は後より架装がけは切倒されて
 憫れむべし駒吉の伏たる儘は驚を振へど大事の深手は働らき得ぎして遂は止命を刺
 貫され遺恨を含て息絶たりとぞ最惜むべき事なりけり

第四十四回

萬城が最迫て、口説たて泣立たる痴情の絆はらひ難てや有藥強氣の半介も今更脱る
 途なきばかりか、斯暮はれての去くは愛情のむ可もあらで屏風の内に進み入
 つ、春の狭霧の濃やか一轉一匯の夢々結びて今既や熟睡前後を忘れし、折しもあれ
 表の引戸を割るばかり打叩きて彼魚榮の三吉が逃たしく入來りしかば、半介が
 へと跳走つ、急がしく之を迎え其爲体くを打ちやるよ彼喧嘩でも爲たりと見へて、
 髪は紊し衣服を破られ手足は血液の點たるよぞ心もどあく胸うち騒ぎ其仔細を尋ね
 る程は三吉の萬城が心利せて汲で出す水は咽喉を濕はしつ、息呼あへず後を見顧り
 「親方なんも知りませんかアレ」ジャンポン打つける、彼の半鐘も熱木の音も
 お前さんの家の火事、イアなか、其ばかりか其火を放た亂暴者が斯々いふ騒ぎを
 演出し駒吉さんの殺されてお妻さんも連れてかれた、イヤモ一實は大騒動、何でも對
 手は浪士で、俺ちやアどふか此事を疾くお知らせせよとて宙を飛でト半分聞
 き半介忽ち狂氣、如く立起りさま連子念をハタと開ひて打見やるよ果して番場の



方は當り火炎光々として天を焼ける意外の事の爲体くも倍と眺めて兩眼を釣あげ一
 お民が敵は捕へられたの復取逃すべし手段も有ふが脚吉を擧せたの返もくも残念
 だつた仮令く敵の鬼でも蛇でも引捕へて踐殺し彼が遺恨を晴させくれんと云かけ
 て既後談を聞ず齒を切み髪を逆立つ、手疾く準備を整のへながら「三公まことと御
 苦勞だつた徐々休んで後から來させへ葛城さらバト云捨つ、樓室は預けし宗近の一
 刀把て挿より疾く裾うち端折跳足の儘めて閃りと戸外へ飛出つ、十歩を百歩の勢ひ
 烈しく既大門を後爲て日本堤を射矢の如く豁然と走來るを是より先功を食ばり我
 一個して撃止んと番場の群を脱出て堤の下に埋伏したる彼悪漢飛彈の金太が進み來
 りし半介を目疾く認め我物得たりと二歩三歩やり違へせて左手ながらも腰刀を抜敵
 めつ、半介の肩尖めかけて後より聲をも掛すハタと切る刃の先は先立て半介疾く身
 を開き遺違ひせて残月の隅なき影と倍と見やり「ハテ珍らしや飛彈の金太、汝れも
 就ては種々の尋ねた事もあり繩を受よと呼はるを耳も掛ぬ不敵の本性冷笑つて

身を構へ(金)尿で食へ何の爲に汝らが縛らふか忘れぬ爲に三年あど此片腕を切れた代り日汝が首を切る、無宿野郎奴覺悟しろト云ふ一言を聞とがめし此方疾く氣を配り扱ひ此奴等我留守宅を焼打爲なる同類あるべし然らば彌く免し難しと思ふければ復讐刃引外し遣送せ閉つ開きつ良暫明く充分敵を疲らせて踰限弱腰ハツメと蹴り金太の堪らず二三間、ツンノメリさ倒れ、處るを半介得たりと飛走つて脊中を楚かと躑躅ながら敵のたたる三尺帯を手疾ひきと片腕を後へ廻して斬鼻樞の三へキリ、縛しめつ、引込さんと爲る折から遙か衆多の八聲して園市平が手下の者ども砂煙りを蹴立ながら此方を指て一散、宙を飛び関をあげ半介めがけて向ひ來りし後の物語いかよぞや尙次回よて説續はたさん

第四十五回

半介の圖らずも日本堤の邊に於て味方の多勢を憑りして胆太くも打向ひ、飛彈の金太を生捕つ引立んとせし折しもあれ園市平が手下の者ども番場の家を焼打して勢ひ

に乗じ半介を打殺さんと寄來れる砂煙りと眞の聲とを聞つ、見つ、ハキと爲されど是畢竟われ仇する彼三吉の語の奴等が打寄來りし者あるべしと疾く心は點頭しかば縛しめられても驚々と尋罵しりつ狂ひ廻れる、金太を小脇に搦込つ、土手を下りて裏茶屋の路次へ入り手拭扼きて生捕の口は猿轡を合せ、寄來し奴等へ打向んと手疾く準備を整のへたるが、時暄嘩の聲俄然と起りて堤のうへ騒がしく踐ちらる足纏うち合ふ鏢纏、手は把る如く聞えしかば半介信と耳を立て扱ひ彼奴等同士打しつるか容子を見んと傍いらの井戸の柱へ生捕を厳しく縛しめ堀を越て土手の此方へ打登り其爲体くを透し見るも右喧嘩の聲と云は是乃ち他の事あらで衆多の與力同心等が事の騒ぎも手當ありしか八方より推取圍て右寄來りし曲者を此處へ追つめ彼處へ追つめ之を生捕んとして動揺めき立たる事の騒ぎも有しかば半介の打笑ひ然らば已も手傳て曲者を手取爲と獨言して土手際へ足懸かけて跳り出で大手を開き大音あげ「番場の士徳、旦那衆へ(番時惣て與力等を旦那衆と通稱す)お手傳ひ致

さんと云も亂らず驚愕して逃んと騒ぐ曲者共を腕力に任せて撲倒し打立て蹴倒し踐
 蹂りて瞬たく間も五人七人手球の如く牛捕たるより残る奴等の事慣たる同心どもが
 十手くらひて薙々と縛しめられ争動やうやく平らざしかば同心等の半介が比類なき
 働らさを賞し且此奴等の今が先其方の宅を焼打したる曲者よて有かれ其方の疾
 く立歸つて宅の始末を着よなと、叮嚀に挨拶し果て尋餘事の後日よ到り宜しく沙汰
 を致さべしと云傳え賊を犁立て一先土地の番屋を指て皆徐々と引揚ゆくを半介の唯
 々とばかり敬禮して之を見送り然も今も今の奴等が巨魁ども覺しき者へ一個として
 見へざりしが其奴逃く逃亡たるか兎もあれ金太を噴糺さば萬事分明あるべしと腹の
 中よ思ひ決めつ、復行立て何事か暫時思案の体なりしが然だくと心中よ點頭、元
 の路次口へ來入りて縛しめ置たる金太が傍りへツカくと進み寄りよ金太の今こそ
 殺さるべしと思ひ決して兩眼を見はり身を慄はせつ恨し氣よ疾腕面を半介の熱く
 と打見やりしが兩眼よ涙を浮めて歎息しつ、後へ廻り先其轡を取除き又縛しめたる



三尺とききて不具を勘入り衣服の前を合せやり帯をひかせ手拭把て身の中の塵はこ
りを拂つて遣ふと思ひも寄りぬ介抱は是れ何だど驚るも呆れし金太は未だ其意を得
されば薄氣味わるさよ悪戯子が、衣を汚して何とも云ひれず衣更させらるゝ母の心
中を測り難て憶面つくりし如くなる手持無沙汰顔色しつゝ、只茫然として居たりけ
るを半介の左もこそあらんと苦笑ひし先立ち「金太なよを慄へるのだ其邊で一
杯やらかさふサア來なせへと手を把つゝ無理ひき立て田町の方へと、進み行たる時
しもあれ春の夜すでも朝はあれてチボロ〜と立昇る日影まばゆら頃と多成ける

第四十六回

鼠穴まれバ猫を噬み、鳥宛まれバ獵夫を啄く、墓なき匹夫匹婦と雖も確く決心し
たる時の容易も動かす可まあらん況んや飛驒の金太が如き兇暴無類の悪漢が死を決
して悪強せば容易く我意を隨がひて事實を吐トと思惟きたるが半介の忽然と其扱ひ
を一變して之を勦はること一方あらん彼が衣服の世話までやきて聽て之を誘ひひつ

一料理店へ打登り固辭するを強つけて先十二分飲食させ昨夜の事何とも云すよ
心よく察思せしかバ金太の始終夢の如く針の筵席に座する如く飲ども酔す食へども
味なく、只ムサ〜として居たりしが良あつて堪えかねけん四下を見廻し聲を密め
何だか口を聞ますよも面目ねへ事ですがアレは悪事を働らひたよ何だつて親方の
俺ちを如斯く思遇て下さる實の取れる一命なら少しも疾く殺して下せへ斯して穩待
くされるだけ却つて辛うムへやすと思ひ入て云出るを半介聞つゝ、歎息し「馬鹿な事
を云まひを元よりお主を殺す氣なら何で斯して勘いらふ、然しおがら疑がひ晴すの
之を見るよト云かけて刀を引よせ小柄を抜とり丁々ハヤと金打しつゝ、「己も男だ此
通り刀は課つてお主を殺さず、就てはお主己の爲お昨夜の騒ぎを起因の勿論アノ曲
者等が發頭人の姓名來歴始終の事まで包まお己も話してくれぬか己も怒じひ昨今で
の親方とか馬方とか些と一人は俠客と立られ何よか面を賣て居ながら亂暴者よ家を
焼れ女房を盗まれ阿弟まで殺されて阿容〜と斯して居られぬわけ、因て昨夜お

主は關のす直さ家へ飛で歸り其曲者を殺やうと思ふ處るへ役人共が、遣て來て彼等を召縛り引立て行たからに既や地團駄踐た處るが喧嘩過ての棒千木切、後の祭と思つたから斯悠々と爲て居る譯よ、處るで今も云ふ通り俠客と稱れる此己が散々な目よ遇ながら自分で復讐されず、役人共の手を籍て辛やく彼奴等を殺たあんど世間の奴よ云ひれて此上の心外ゆる愛でお主頼むのだが何とお主己が爲よ右の話を爲て呉ねへか然それバ己一個で幾百人の曲者でも片ツ端から躑躅殺し遺恨を晴し世間も面へ塗れた泥を拭き溜飲を治める心だ尤も先刻の役人共の事の仔細を糺して貰へば、分るめへ事でも無が然れで、事が面倒で且承ひくよ違へねへか因でお主頼むのだ、ト云のも昨夜云た、お主が言葉よ己を指し無宿と云れたからいお主も己の家を燒き無宿よ爲た同類どの當時疾く悟つたゆゑ乃ちお主尋ねるのだ何でも己の思ふよ其曲者の發頭人にお主の前だがお主より最とズンと沖を越た、兇漢よ違へねへと大概見込を附居から尋ねお主よ遺恨いなし又ツノ時の機よも

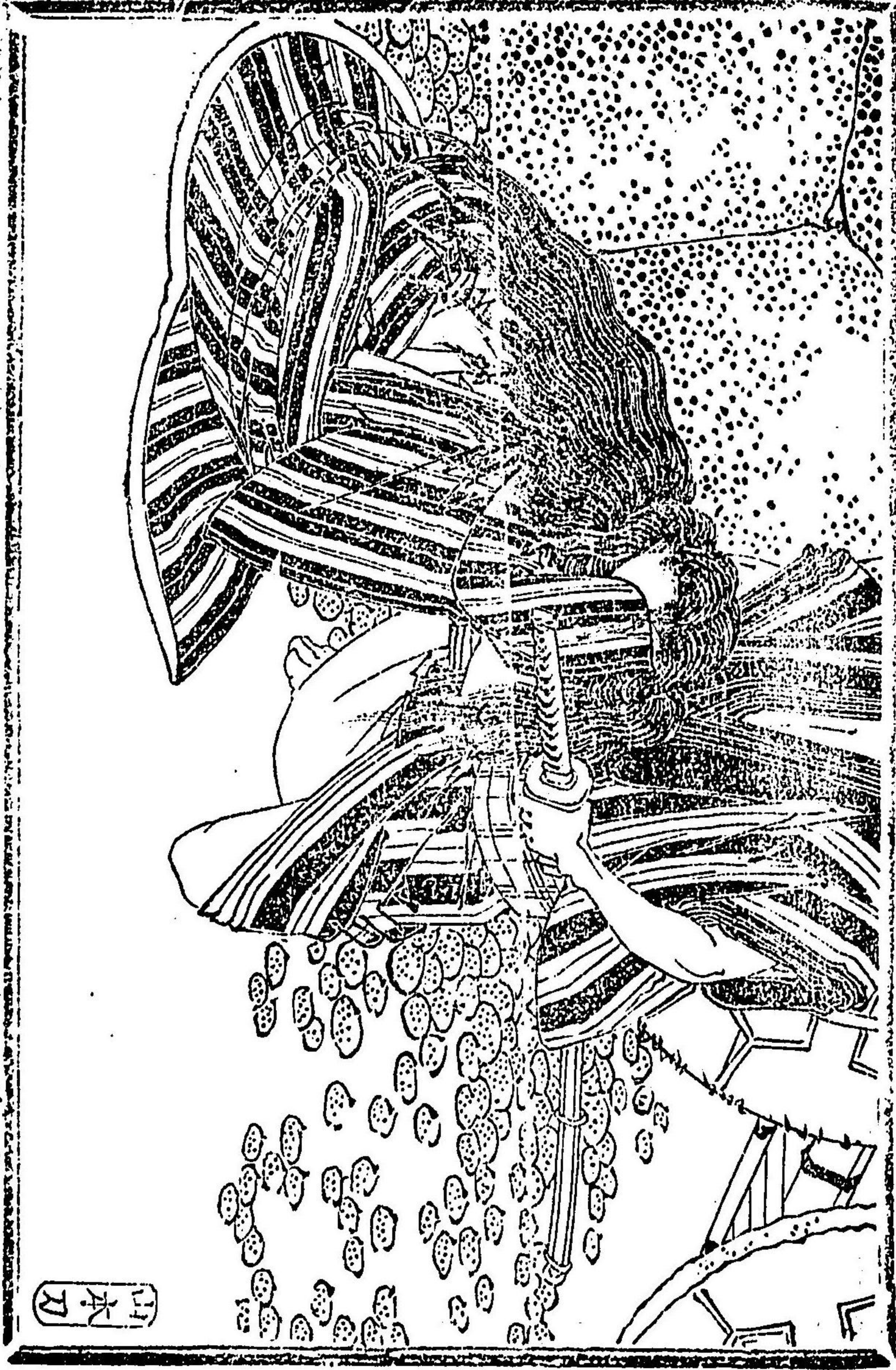
しる己を一生不具よ爲た、其仇よ廻り逢バ誰しも厭つちや居られね譯ゆる先刻お主が己よ向ひ刃物三味した事も己や尤もだと思つて居から其邊に此方で氣の毒あど、思ひこそすれ中々以て己の方で露いさ、か遺恨よ思ふ道理もあいから何も歎も今までの云々のさらりと捨て昨夜の始末の一五一十を疾く話して貰ひてへ金太頼ト懇切よ斯の如く事を分て且宥恕頼みし始終を聞て有樂の金太も身の毛たつまで感トたるが不覺涙を拭ひながら大息呼て哀暫時く默然として考え居たりと

第四十七回

虎狼よ均しき金太が如きも半介が事を分ての頼の始終を聞取りつ又懇切なる扱かひよの有樂改心したりけん且感じ且恥入り且此時熟くと思ひ廻せば空怖るしき、身の罪咎の今更よ悔て復らぬ淺ましさを包み難てや鬼の目よ生れて始めて感涙を溢しア、悪かつた、親方何とも面目ねへ何を勘忍して下せへ臍の緒切て昨今更で何でも心の及ぶだけ悪事ばかり働ひて善根の善の字も知らねへ程の俺ちだがお前さ

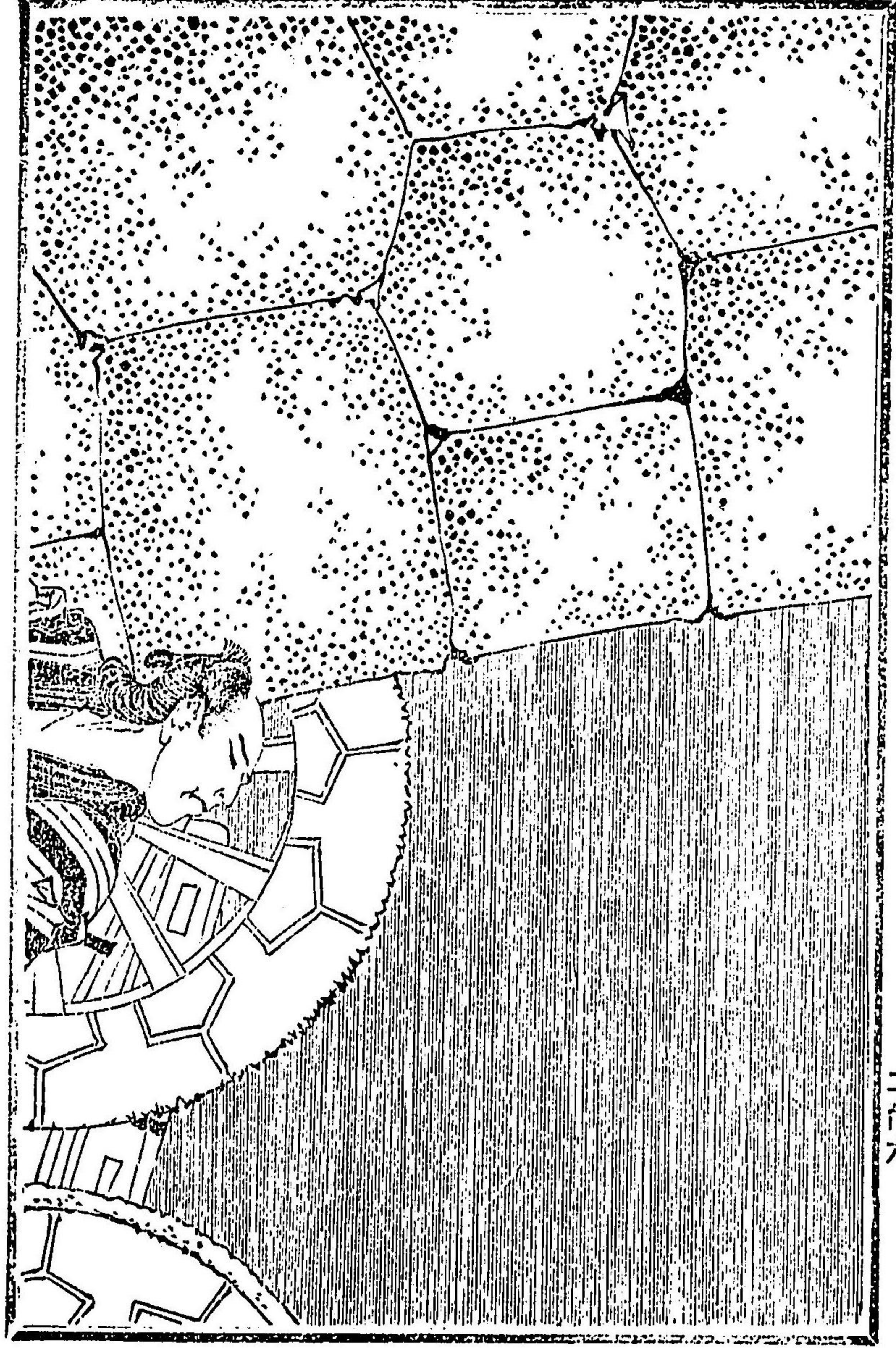
んの今の話で覺へず感入たものか今日と云ふ今日汚ねへ物を、拭つた様も夢が覺
 め二十年來積で來た悪事の程を思ひ知り實は後悔いたし升た就てのお聞申されねへ
 ても、云のすの濟ねへ懺悔ばあし昨夜の事云及ばす今まで積た悪事の始終をお
 話し申して切てのことお前さんの手は掛り殺して貰はふ罪滅べしよト、云かけて容
 儀を更ため是より最初馬道邊よて或老人の大金を摺取り、其金よりして團市平は圖
 らすの奇遇せしこと次は先夜吉原へ行きお七の葛城は遇たること其折葛城が待遇わ
 るくへ後で仇を爲んと思ひ銀錢一本盗みしこと然るは昨日云々よて團市平が作藏と
 三吉が話しを聞き尙土屋の門戸に到り内の容子を窺がひなとしつ委細の話しを聞居
 し處るへ半介が出來り見咎られて盜賊あらんと罵しられたる一言が彼心魂は貫徹し
 て且一ツの金太が爲よと昨夜の騒ぎを起せしこと又件んの市平こそは半介が先代土
 徳を殺せし、仇敵ありしと云る事を昨夜はトめて聞たる事まで餘さず漏さず物語り
 且市平は品川沖の云々ある船の中を平生は棲據と定め居こと又昨夜無残も駒吉を

殺せし者乃ち市平下手人あること又市平の手下共がお民を攫ひ行たる先の多分
 件んの船ある可こと、又先のはと土垣の上よて捕座の爲に捕へられしは右市平が手
 下なること且我の仲間奴等へ奇功を見せんと脱走して土垣の下に垣伏し半介が歸
 るを待らけ狙ひ撃んと爲たりしと處る其事忽地思ふは違ひて遂に半介は捕へられ事
 の爰及及びし事まで遂に一は翻りつぎ右云々の譯されば所詮生存居た處が曉かれ早か
 れ召捕れて三尺高木の上へ登らよやならぬ身体あるゆゑイザ縛しめて番屋へ率と
 も刀は掛て殺すとも何れ處置して暮よと云ふ實は案外なる懺悔雨を半介つらく聞
 果しが豁然として胸うち開け悦び何と驚ふるものかく扱々よくも話して呉たぞ其
 で萬端明瞭した然らばお主へ己も亦た話し聞せる仔細の有がお民の事が案トられる
 ゆゑ、片時も疾く其本船へ、打寄んと思ふ程は其處方の後談は盡すべし早く案内し
 てくれよと云も了らず遠たしげは勘定をせせて立あがるは金太も心得先よ立つて
 共此家を出ると其ま、品川さして二人とも宙へ飛で走り行しが高繩の大木門邊よ



川柳

山水



二百六

て髪振系しつ向よりフア／＼來りし女あり今走來れる半介と行違ひさまアツとばかり走 拵つて後より逃たしく絶り着くを半介驚るき顔面を見るは是れお民よて在たるよを扱は無事よて居たりしかヤレ目出度と思はず知らず抱よせ引よせられて且は暫時く言葉もあらず嬉し涙は暮れ居たりし夫婦の情合さも有べく最道理よを見へたりける

第四十八回

安危存亡いかよと思ひし妻のお民が命のでたく、爰は再會したりしか半介の之を引よせ思はず嬉し涙を注ぐは況てお民の絶入ばかり絶り着て泣入つ、其儘あよとも物いはず暫時して半介の涙を納め四下を見廻し「其歎の最もあがら白晝と云ひ往來よて人の見る目も繁けれは兎も角はなしの後よして本所へ歸るべしと耳よ口よせ云聞るをお民さつ、打斷頭「今朝の騒は兎漢達の手込よの遇ましたか幸ひひ身体も汚され品川の橋向で捕史は捕へられて兎漢達の番屋に拘られ私に今まで謝へ

られて幸と母が開たゆゑ嬉しさま氣もトギマギ急で歸つて参つたところで是然して家の何しましたか駒やお大も無事でよかと問れて半介當惑したれと何事も退ぞひて後よ徐々歸らんものをと「ナニさ皆は無事だから兎もあれ早く歸らふト云かけて不圖心づき金太の奈よと見かへるよ四下よの影もあしハテ何れへ行たるかと彼方此方を見廻せども絶て其行方を知らず扱は彼爰よ至つて再び變心逃亡したるか或ひはお民よ面を合をを目おき事よ思ひ特と影を匿したるか何れよもせよ俟よ及ばずイザ行べしと決心して馳てお民を辻籠り打乗せ、我は是よ引そいつ、心のこれを止がたさま番場を指て歸り行しを最前より物の蔭よ身を匿して窺がひ居たるか金太の惘然あらはれ出で、ア、此處までの來もの、今アノ人が遇つた女は昨夜正しく同類の者等が引攫つて連れて行た半介殿の女房のお民よの違ひなしと早く考え就て見れば又今更面目なさま居堪れずして影を匿し匿れて二人を見送つたがト云つ、思はず大息つき、爰よ再び手を袖て彌ます／＼身の罪を思ひ悟れば自然から懺悔の風の吹立

て胸の妖雲消うせつ始めて出る生得の心の月も越方を一々考ふれば我さへ呆る、
 既往の悪業屈指かみみ盡されぬ悪事の何れ輕からぬと掠中て淺ましき何ぞや淺草
 馬道よて或老人の大金を摺取し事と昨夜の事あり右老人の何處の誰か元より認めぬ
 者ながら其時刻と云ひ處ると云ひ且の彼が衣服を思ふは相應からぬ大金を所持して
 居たりし事と云ひ萬一ツも吉原までへ娘か骨内の女子を賣り其身の代の金を以て
 歸り來りしものありしか、斯見當を着て惟れば一昨日の晚葛城が異よからんだ謎々
 とアノ女がアノ云ふ處るは身を沈めて居た事と云ひ今更驚くり考がへるは萬一や彼
 四百兩は其邊の金で無つたか、何ちよしても遠からず取れる一命のある中アノ
 女の身賣の仔細を聞知してみて然らば切て其邊の罪を償ひ詫言も爲すならん
 其次の昨夜ぎり別れて仕舞た市平を尋ね出して撃て殺め半介殿夫婦へ對し今度の悪
 事を償ひ置其うへ公儀へ自首て出て刑場の露と消え身の罪業の勘定立ん然だ
 ト腹の中へ忽地思案を定めつ、手疾く腕の手拭の兩端把てパツたりと打開きたる布

音も世は謂首を切る音と、思へば更急がる、善し歸心の矢よりも堪らず、煩彼
 りして高繩の河岸の小舟を雇ひながら本船へ乗つけて留守居の者へ即造の辭柄を
 以て欺むさつ、市平の蓄財金と思ふ儘に掻攫ひて待せ置たる舟も乗り元の岸より上
 るが否や是も亦籠を飛せて吉原へと走らせつ、處るの者も金を握らせ葛城が身賣の
 始末を詳細に聞取し果して思ふ處るは違ひ前回の一五二十を悉ごとく知り
 得しかば金太も今さら堪りかねけん慚愧分よしなきばかり只管後悔臍を噬みて聽て
 處の者も別れつ何か心中思案たらしく田町の方へ歸り行しと

第四十九回

甲話休憩葛城の彼夜俄かの騒動して遮たしく半介も別れ居たり立たり氣を苦たる
 が斯て有べきよあらざれば彼若者作藏も頼みて、半介一家の存亡安危を探らせんと
 て出し遣しは聽て作藏歸り來りて前々回の事の始末を悉ごとく語りたるのち更言
 葉を更ためて「然いふ譯で番場の最寄の太い騒ぎで親方(半介を云)もお妻さんも行

方知れを實よお氣の毒事有まほ、就て又聞ましたよ、今朝白々明のころ日本堤
 で兇漢其が役人衆よ追詰られ十人許り捕られたとの、專ばら噂を致し升ゆる若や右
 の兇漢の親方の家を焼まえた其兇徒で有ふかと漸々聞て見ました處る果して斯々い
 る事で親方も役人達よ手傳て悪党共を生捕よ爲せつたさふです、而から何へお出よ
 成たか其場を立去されたよし、シテ見れば親方の番場の騒が濟だ跡へお歸り成さ
 れた見當ゆるお身体よ別條あるまひ先程安心なさひまし其後の容子を聞てお知
 らせ申しますからとの、話の次第よ葛城の少し愁の眉を開けと其後の事の心よ懸れ
 ば若是限り暫時の相見ことも慥のぬ事かと胸を痛めて日を暮せしよ點燈ころと思ふ
 頃をひ一人の男が届けたりとて小形なる風呂敷包を店の者が持來りしかば葛城あや
 しみ之を開きて、其内を改ため見るよ思ひきや封金の百兩包四ツありて其はか日
 外紛失したる我銀釵一本と「萬城泡金太右」と手紙したる左封の手紙一通出たるよ
 ぞハテ不審と打開きて其文言を讀下すよ、代筆よのへども取急ぎびよ依り要用バ

かりや上は扱赤面の至りよて何とよ言語同斷あから私しこと御承知の通り年來無事
 を相働らき無数の罪作りひひしが、其中よも甚はだ以て面目次第これたき事の先頃
 云々の處るよ於て御老父
 由衛門様との存じがけす
 簡様よ相働らき御懐
 中の四百兩を摺取ては處
 る今朝圖らま堤よ於て半
 介殿よ生捕れ既殺されん
 と存せしよ却て不思議よ
 命を免され尙云々の御恩
 を蒙ふり辛やく年來の先
 非を悟て又斯々の疑念を



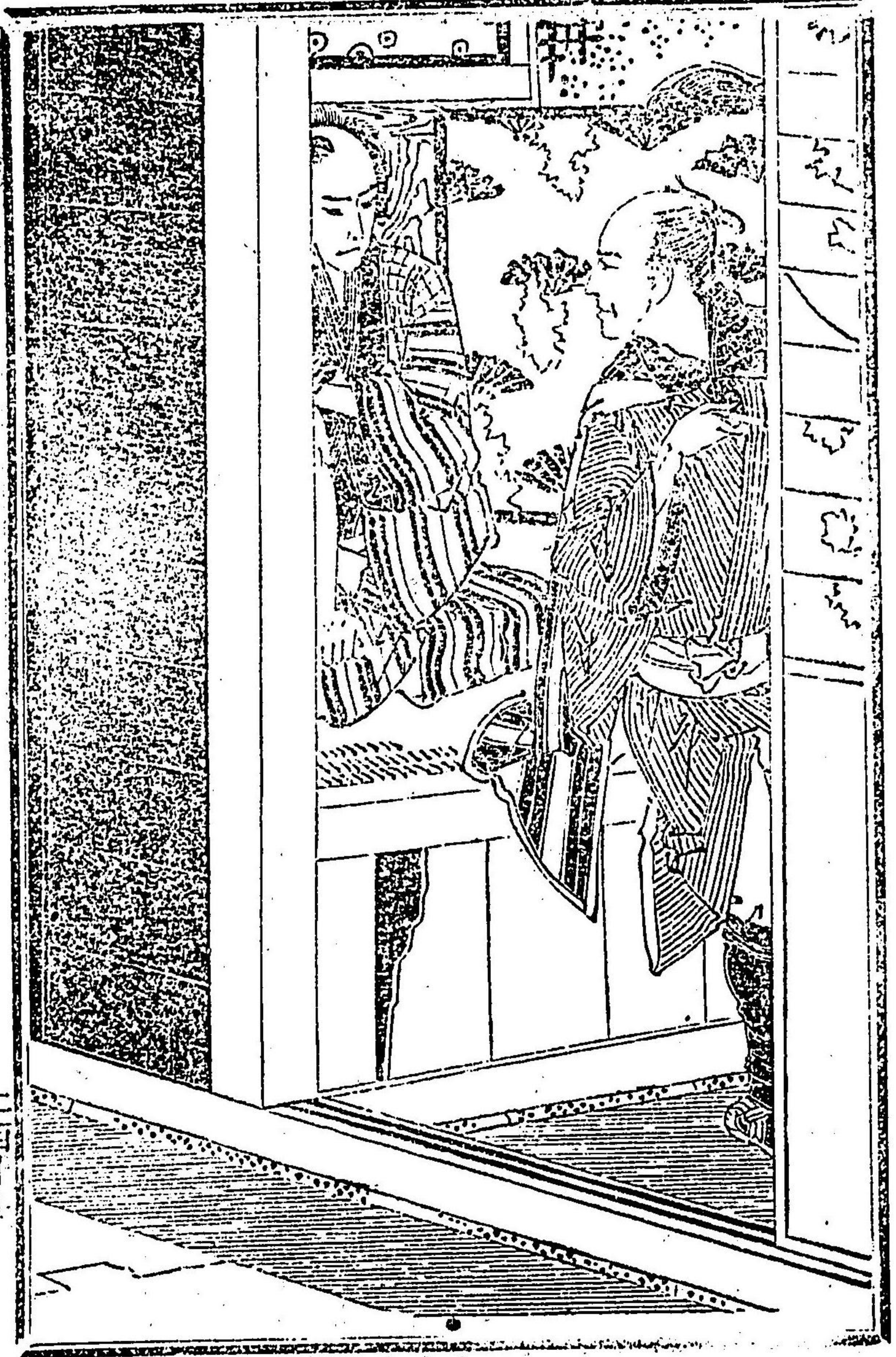
起し御當所の者も聞たる處る右四百兩の金子とヤモのお前様が身賣の金と事明細も承知致し今更兎角の言葉もあく留以て幾重も不埒の段々やわけ御さあく因て時後れいへとも先右の四百兩と又云々の心付よて日外盗参りの銀一本、儘も御返上申しの間だ千萬御立腹と存じいへとお受取り下され度い、次は斯々の次第も依り昨夜思はず半介殿の留守宅へ亂暴相仕向いゆる、其お説の心よて半介殿先代土徳の仇、團市平を撃取んと、存居い處る私しの悪事其筋の耳と成り隨へ八方へお手當あつて最早寸暇これあきよつさ只今此川を果てと其ま直さま役所へ自首て出んと、覺悟致い間だ右市平を尋ねかねいゆるお前様より半介様へ右の次第おん道と成くたされたく偏もお頼申い箇様致し居いうちも既ちらはらと手當の役人、相見受いよつさ向々や上たき事へ山々いへと早々書納めり、金太敬白」と認ためあるゆる萬城の爰よ至て果して先夜の夢の跡さへ更思ひ出られて、驚ること大方ならを元より心やさしければ亦何となく憫れを催はし再び作藏も吩咐て心當を問合

させしよ右金太の自首したれと其罪を許されずして後傳馬町の牢内よ於て、遂は首を刎られたりと(此處る前回の出像)正しく聞えたりしかば萬城の彼が爲よ其改心を憫むの餘り心ばかりの金を包みて間近き寺へ布施としつ一遍の回向を供餘せしとぞ是の之のちの話し話なれと金太が終を記せしよより筆の順も添をえ置ぬ

第五十回

爰よ又吉田半介の、圖らずも高繩よ於て女房お民よ再會せしかば互ひよ不勝の悦びを極め、程なく番場へ歸りたるが是より先き番場よてい豫て半介が恩を受たる遠近の人々走集まりて火を消し其邊を取片づけ又早桶を買來りて駒吉が死骸を納め彼是始末を着たる折から此騒動も避易して逃去居たるお大等と又吉原より歸り來りし三吉も落合て只管半介夫婦の許のみ打案して駕を罵しり騒ぎ居たる處るへ夫婦の歸り來りしかば皆悦ぶこと大方ならせ就中お大と三吉の半介夫婦を走り迎えて集ひし人と諸共よ或ひの其無事なりしを祝し、或ひの其遭難を惜むなど衆口云々盡し

なきを半介の之を謝して此時始めてお民へも駒吉が最後の事を云々なりと告たりし
 かば、お民の之を聞もあえず駒吉の桶を開き見て潸然と打泣けるを半介切りも叱り
 止めて我も血涙を匿しつ、纏て三吉お大も頼みて先駒吉の亡骸を香花院へ埋葬させ
 其他萬端取扱かひて、惣て辛やく事はてしかば打集ひし人々の私かよ彼是相談を整
 のへ夫婦が爲よ家を買んと其相談を語りたれども半介の承引せ、折角の厚意なれど
 拙者の別よ所存あるゆゑ其義よ及ばせとて固く之を辭退しつ纏てお大も暇を興
 へて人々も別れを告げお民を伴なひ住懸たる番場の河岸を後よして其日夕暮のころ
 南の方へと、足を疾めて立去たるを人々本意なき事と思ひて甚く別を惜みけるまぞ
 況てお大の哀別の悲しさ袖も包かねけん泣沈みつ、見送りたりとぞ、去程よ半介の
 お民を伴なひ番場を立去り其夜つ但ある旅籠へ泊り、此時夫婦相對して前々回の事
 の仔細の互ひも知らざる處るを云いで語りつ胸つ夜を深せしが半介の言葉を改ため
 右の通り譯なるゆゑ以後再はち心を配りて圓市平を尋て取り先代の遺骸を晴さん



幸ひひ彼折市平が容察年齡骨格まで大概見認て覺えあるゆゑ後日これを尋ぬるも
 大い便宜を得たるなり、又葛城が身の上も何とか一ツ工風して受出す筈で有なれ
 ど我夫婦斯の如く圖らず零落したるから當分何とも詮方なきゆゑ暫時々節を待ん
 と云にぞお民も別手段なければ只管歎息するばかり其夜の空しく語り明し翌日の
 朝はやく夫婦此家を立出て八丁堀まで辿り來り爰は甲斐なき裏家あるを借宅して膝
 を入しが一齋半給なき身よの朝夕を送りかねて夫婦とも日傭を取り或ひの雪ぎ
 洗濯などして辛ふとて日を送るうち當年(安政五年)も何か過ゆきつ復二年あまりを
 經て万延元年の春を迎えお民の二月廿日の夜は玉の如き男兒を産たり、朝夕の炊烟
 さへ思ふ半も沖かぬる貧窮うちよて半介は殊のほか之を悦び其兒を半葉と名附つ
 、寵愛すると大方ならせ斯て母子とも肥立よるしく二七夜と成たるころ夕暮告る豆
 腐屋の賣聲聞ゆる點燈前後に旅仕度せし一人の男が小腰を屈めて入來り、先頃飛脚
 の言傳より爰の住所を承知いたし參上したりと云ふ言葉は半介の何事か心得あり

けん立迎えて四下は兩眼を配りながら先或方へと、際の塵打拂つて件の男も、腰を
 掛させ鬨は跨がり門の戸ハツタと締切つ、戸締かたく用心したりと此段容子ある事
 なるべし

第五十一回

八丁堀の裏家住居あるも、甲斐なき上總戸の締を固めし半介の彼旅仕度せし男を請
 じて火鉢の邊に座を占させ其姓名と來意を聞し男は暫時四下を見廻し纏て纏ひし脚
 袴の内より一通の書翰を取出し之を半介へ手遞しするを半介は受取て脇近みある行
 燈へ火を點しつ、書翰を開き始めより終まで熟々と讀了りて手を組み頭を低たるま
 、何事か熟考しつ、件の男は打向ひて額を合せ聲を密め「此返書をど存ずれども
 書翰の兎角秘密の事の露顯し及ぶ媒酌なれば只口上よて返事を申さん耳を貸たまへ
 ト云かけて其ま、口を指よせつ、何事なるか良しばらく耳語告る云々を彼の男の一
 々點頭「惚て心得まして去る然らば左様傳言をべし重要の事ゆゑ少しも疾くお暇い

たもと云もめへき手疾準備を整のへつ、戸外へ立出會釋しながら尙宵暗も電光の消
 るが如く走ゆきたるを半介の見送りて然氣なき顔色し、二枚折の屏風の中も、スヤ
 く睡りし母兒を見やりて思はず落す一取も遣方もなき無量の苦心を袖も包みて退
 るきつ、切り又歎息したりしとぞ「去程も半介の是より後らお民も半葉も殊のは
 か肥立よくして既や手も掛らす成しかば、或人は世話を依て尾張町三丁目の仙徳屋
 と云ふ呉服問屋へ奉公も住込つ、己が口を糊しながら其給金を取り宿所へ送りて妻
 子を養ひ居たりけるが或時久しく打絶居たる吉原の若者かの作藏が尋ね来しよぞ
 半介の身の零落も在らすもがなと思へども有難も顔を見られては知らずとも云かね
 けん立出て挨拶しつ、先の葛城が安否を問は作藏の腰を屈めて別後の口説を演も子
 らず葛城より届けたりとて一ツの小包を指しながら「實の先日用事があつて此處を
 を通りかゝり圖らず旦那が店頭にお出み成たと思受ましたで、葛城さんへ其事を
 話しました處るナイ」泣いての大悦こび今日旦那へ此包を届けてくれとの頼



ゆゑ持参いたしました下の口上は半介の不審暗ねと其包を受取るよ重量なるよぞ
 心ひそかよ不審たれと傍の見る目も厭けん其包の事の何とも云はず只管よ作藏が長
 途の使を勞らひて、返事の何れ此方より遣のすと致せべし兎もあれ一烟吸て行ト云
 を聞かけ此方の手を振り外よ急ぎの用事もあるゆゑ今日のお別れやしますト云すて
 急がひしく歸り掛るを半介よびとめ葛城へ言傳を言葉短かよ頼つ、其儘奥へと歸
 入しが其日の暮るを待かねて鉄小燈を携さへつ、物置庫の内へ入り人目を密び葛城
 が届け越たる包物を打開きみれば遣の奈よ四百兩の封金と多一本出たるよぞ半介ま
 まく怪しみて其金を推開き讀下し見れば思ひきや彼金太が改心よ因て最初由衛門
 が奪られたる大金が復りしゆゑ折から彼方の貧苦を幸ひひ差贈るゆゑ此金よて再た
 此世よ出で花々しく俠氣を磨きいへと云よ最殊勝なる文言よして且是まで尋ねたれ
 と其方不明よ依て云々なりなど書そえあるよぞ半介の身の毛の立はと驚るき感じ
 て多堯を顔よ推當て金を仰だき、感涙を拭ひあらず暫時吉原の方よ向ひて合掌しつ

心中よ其厚意を謝したるま、頭を低て居たりしとぞ

第五十二回

絶て久しき葛城が珍らしからぬ事ながら常磐心の色かえぬ實情を包し大金と思ひを
 演し支の面よ、剛氣不屈の半介も不覺の血涙よ暮れ果て暫時その儘ありたりけるが
 良あつて心氣を勵まし此年來思ひを碎き工風を凝して心底の秘密の事を彼方此方と、
 人の勿論神よさへ知らさすと思ひ壯士が、一旦誓ひし言の葉よ花を咲せ實らよべし
 と千辛萬苦の中よ在て彼中將が御首級をやし受んと幾度か或ひの虎穴よ入たる事あ
 り、或ひの龍潭よ潜し事あり、火を躑み刃の刃を渡りしも數回よ及びたれを運拙な
 くして事を遂す本意なき事の限りありし、僧るよ先夜の書翰よ依れば日ならせして
 人々が事を起すと覺えたり就ての我も應分の志念を致さんと思ひよけれと貧苦の中
 よ妻兒を捨置戦死せんこよ有業よ心ぐるしかりしが今圖らする葛城より多分の金を
 贈くれし勿怪の僥倖此事あり卒さらば立歸り密び密びよ準備せん忝トけなしと心

中ちゆうは且かつ思おもひ且かつはかりて手て疾はやくゆと封ふう金きんとを内うち懐くわい中ちゆうへ納なめもあへず物もの置お庫くらを走はしり出いて俄はかゝ病びやう氣きなりと云いたて強して身みの暇いまを夜よを込こめて八はち町ちゆう堀ぼりの宿しゆく所じよへ歸かへり來きたりしとぞ、然されバおしの夜よ入いりて良りやう人にんが俄はかゝ歸かへ宅たくしたるハ故ゆある事ことと心しん配ぱいして其その仔し細さいを尋たづぬれど半はん介けいもこしも頓とん着ちやくせせ只ただ止とがたき所しよ存ぞんあつて急きふに歸かへり來きたりしのみ心しん配ぱいするも及およばずとて是これより十じゆ日にち餘あまりを経へつ、三さん月げつ二に日にちの夜よとなりぬ、今こ夜よの宵よひより北きた風かぜ烈れつしく冬ふゆもあちで降ふり出いたせし雪ゆきも肌はだも凍こるばかり實じつは片かたそぎの軒のき間まより吹ふ入いる吹ふ雪ゆきたえ難かたさゝ半はん介けいの走はしり出いて酒さけ肴さかを買かい來きたり夫ふう婦ふ合あ膳ぜん愉ゆ快かい氣きは世よの中ちゆうの雜ざ譚たんなとしつ小こ夜よふくるまで飲の過とせしが時じ刻こく來きたりと半はん介けいの先まづ妻さい兒にを打うち臥ふせて我われも伴とも寐ねの枕まくらも就つしが暫しば時じしてお民たみが寐ね息いきを驚おどかひ起お出いて豫よて準じゆん備びの装しやう飾じやくを整とのへ一いっ刀たうたばさみ短たん銃じゆうの玉たま込こしたるを携たづさへつ、我われ家いへちがら音ねさせしと出い足あし入い足あし裏うら口くちより戸かど外へ立た出いで草くさ鞋せを穿はしめ笠かさを翳かして一いっ散さん、愛あい宕たうの方かたを心こころ指さし彼かの若わ鷹たかが小こ鳥とりを追おひ脱だつ兎との山やまを走はしるが如ごとく何方いづ方かたともなく走はし去さたり、夫お程ほどよ、明あれバ三さん月げつ三さん日にちと成なり上かみ巳みの佳か節せつ式しき禮らいめでたく在あり



江の諸侯等陸續進綿何れも登城の行列立て見附くへ繰込たるが尙降しきる雪を凌ぎて此時水戸の脱藩浪士等、十有七名松田見附井伊中將を狙撃しまいらせ遂に其みん首級を得て、企望を送たる騒動あり是の既世の人の周ねく知れる事あれは説き、然れば浪士の中よ於ても彼有村治左衛門の拔群非凡の働らきを顯し、群がり蒐れる中將方の太刀を開きつ打拂ひつ時移るまで闘かひたるが其身も既此彼を既や數ヶ所の深手を負て今はや雪に踏入り最も危うき後の方は鐵砲の響一發して當の敵手を撃倒せしかば有村不思議に危急を脱れて味方の壯士の後殿しつ、馳て其場を去たりしかば、騒動ややく治まりたりとぞ當時實に萬延元年三月三日の早朝なりしと

第五十三回

夜を込て、良人が密かき出行しを知らぬか民の宵の間も常もあらで半介が盛置したる酒の酔え、寒さを忘れて打臥居たるが明方ちかく成ころをひ半葉が泣聲耳に入

りて不圖目ざめつ、傍を見るよ半介の影もなし、扱の廁へ行たるあらんと思ひよければ氣よ止す乳總含ませスヤくと睡る半葉は添寐して肱枕しつ乳疲は復寐の夢を結ぶ折から雪の晴ねと黎明の軒端よ來なく群雀、求食かねてや驚すしり聲聞つけてか民の起出で見れば良人の空蟬の裳脱の竟の臥床のみ冷たる儘は儲けありて其人の未だ影なし、最初こそ苟且の事と思ひて扱止たれ今の密かき驚ろきつ又不審つ眉を曝め「モンお前さんく」ト二聲三聲呼立れと荒神松の點頭のみ誰とて應答を爲ものあきよ「ハテ今時分何したらん買物でも行たか知らん兎もあれ不審な爲体くト口の内よ唧やきながら半葉を密と叩きつけ起出で彼方此方と家内の容子を案するよ裏口の戸を引寄たるま、輪搔鉄を外して在り殊さら常は秘置ける宗近の一刀と短銃も紛失して其邊惣て狼藉たるよまか民の今さら仰天してハツと驚ろき胸を打ては既や堰ぐり來る血の涙を拭もあへず聲を慄いせ「ア、知らず居た」有繋剛氣な半介とのも斯必迫して世過さへ爲かねる今の貧しさよ私と半葉を置去りして逐電され

たかエ、まア何と、アノ情ない爲されかた恨ししひこと悔しひこと聞えぬ人がト我
 を忘れて控と倒れつ泣伏バ物の響目を覺し共音泣る幼兒を抱き取り抱しめて身
 も浮べかりいは、しる瀧あす涙すでも受け袂受て良時、堪ぬばかり泣入たる
 が斯てい果じと氣を取直し先兎も角も準備して心當りを尋ぬべし、尋ねて逢ず此
 兒と共に生るも死ぬるも母子が一命を天に任せ奈もとも成ゆくより外は爲方の
 無ものをも分別しても復更禁めかねたる涙の間より見れば半葉が地蔵顔、あんよ
 も知らで機嫌よく胞に壓されニコニコと笑ふ目元も口元も良人は瓜をニツと思へ
 是も涙の種とあり果しもあらぬ悲しさを辛やく思ひ止まりつ、臺處へ立出て土竈の
 下折くべる、鹿朶も連理の睦ましく枝ぶり憎き身の暮なさは是も又た涙の種よと立
 たる儘打泣しがア、我ながら愚痴ありしと思ひ返して甲斐々々しく水を入んと釜
 の蓋を取除け内を差覗き、但見れば奈よ良人が手跡の、遺書を一通と封じたる金二百
 兩とを釜底に納あるよお民のいよ、打驚るまで慄へる手先取揚つ、打返し見

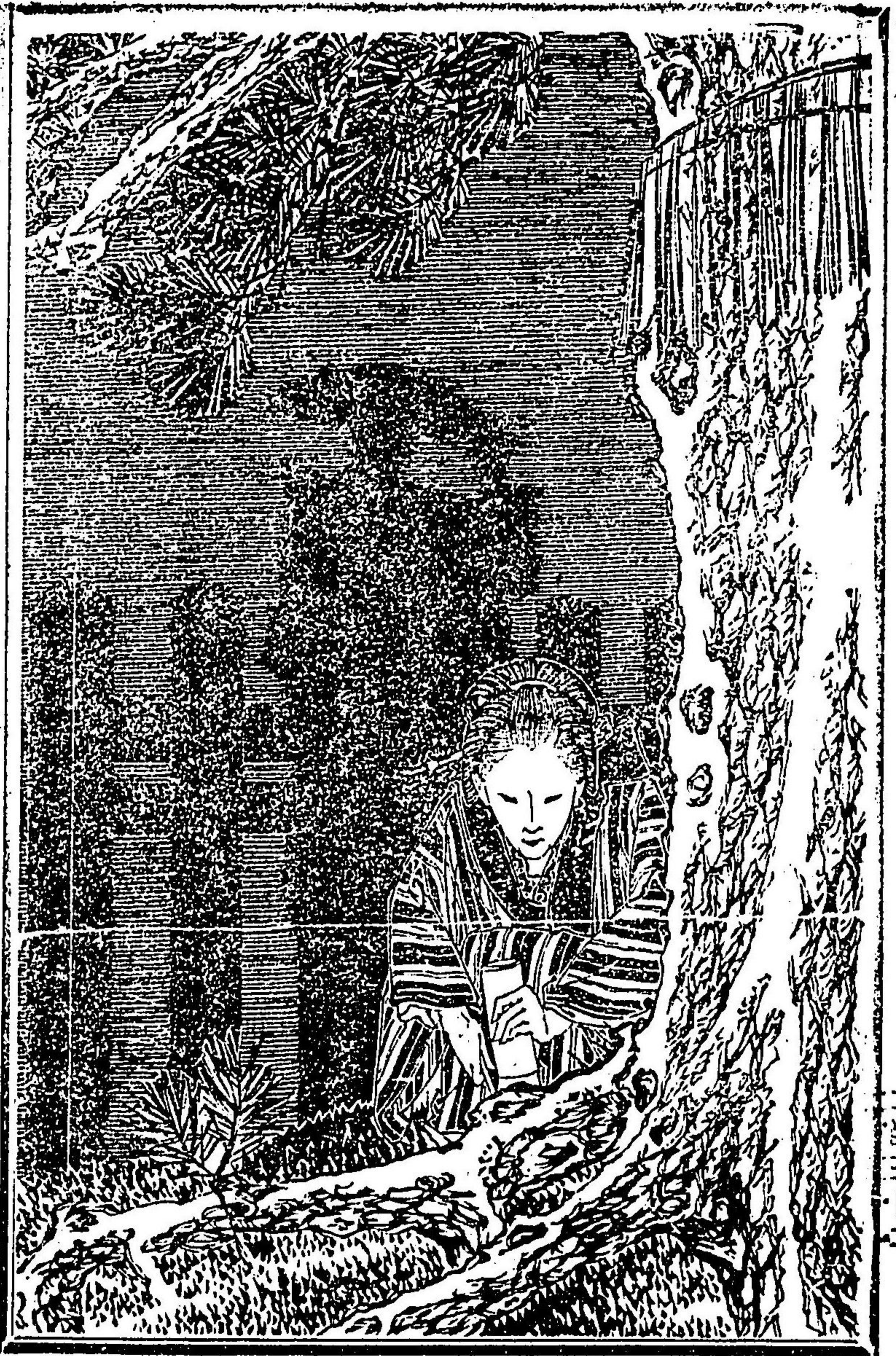
れば良人より我も當たる多なるよ封推切て讀下す何事も省略しけん文面をこぶ
 る淡白よ「只我等こと仔細あつて今夜よぎあく逐電したり就て殊に依り一命なし
 若我等歸らず此金を以て兎も角も半葉を養ひ世を渡れ、命あらば遠からず再會
 いたす了簡なり但し我等逐電一義の夢も人も漏すべからず此手紙の一覽のうへ火
 投じて焼捨よ又明日中いづれへありとも速やか転宅せよ尤とも人も知られぬや
 う家主其他近所の者へ引越先の方角を違へ、宜しくやし繕るひ置べし尙々引越先
 の義の小さき紙に相認ため竹筒の内込込込込込込込込込込込込込込込込込込込込
 只願ひく半葉が養育偏頼む云々の、文言よて有しかば民の恰がら夢情も分
 よしもなき意外の始末を再三再四思ひ測れと量り難つ、茫然と暫時く頭を傾ふけた
 るま、尙打案じて居たりしとぞ

第五十四回

生來さ實義わり且惻發なるお民なれど半介が遺書の多の情實を判し難て暫時思ひ煩

らひしが「兎も角も一命あらば程なく遇んと認ためある、筆の跡こそ力なれ逐電したるこの本は奈ある情か知る由なけれど願ひくば一命めでたく疾く歸つて参られたし又不思議なり此大金、今の身分で何を何、才覚された物なるか良人は限り飢死も爲とも汚ちい心の持ぬ管ゆる他人の物を何と云ふ迂参事有りまじきが何として調達されたか心得がたき事かなと思案の胸を痛むれども思ひ難つ、小首を傾ふけ「右さへ思ひ分がたきよ今日の中は移轉せよ移轉先を云々せよなを彌々増々怪しき事あり、兎もあれ昨夜の爲体くの一通りの事ありわらじ所詮何方を尋ねたりとて容易の遇がたからん遮莫く多の文面は随がひ何れへなりとも轉宅して再會の時節を待んハテ異なる事成しものよと再び思ひ直しつ、先金と遺書を佛壇の内よ納めて手疾炎の準備を整のへ幼児の小櫛なども残る方なく川意して件金の金の封を切り店賃其他少しづつ、の買借の拂ひを濟せ多くもあらぬ物ながら世帯道具を賣尽して家主はトめ近所の者への淺草最寄へ移住すると加減よく云ひ置つ、母の襤褸を纏へど

も兒よの裝飾を麻の葉の新らしき生衣を着せて半纏背負十文字、いと甲斐くしく準備を整のへ其日真昼の過るころ深雪ふみ分け辿々と八丁堀を立去つ、何方ともかく急ぎ行しと、是の之れ説すとも半介が約を履で井伊中將狙撃の一義よ加りたる處より妻子よ難義を掛させしと思ひ圖りし遺書の文面よ依り其意の得ねどもお民の云のれし儘よ隨がひ事の爰よ及びしものなり然れば櫻田異變の最中、土手の上の並松蔭より鉄砲を放ち有村が危急を救ひし曲者は是吉田半介ありしと」扱此話柄の暫時止めて爰よ又、彼葛城の父由衛門が後譚の始終を尋ぬるよ由衛門の彼月彼夜、淺草の馬道よて金を奪ひし曲者を追捕へんとて狂氣の如く其跡を慕ひながら彼方此方と走廻りしが奈よして捕へ得べき徒らよ身体疲れて今の一歩も進み難さよ淺草寺の寺内へ入り但ある石段よ腰打かけつ、爰よ熟々以ひみれとも緊要の金を失なひての番場へも歸り難く我子ながら葛城へも面を向べき由なさよ彼是心を苦しめつ、其工風を凝らしたれと奈よとも詮方なさよ當惑せしよ、良暫時茫然として居たりしが



「兎もあれ空しく勘考せしとて世に益なき事なれば此儘一旦古郷へ歸り仮令無理ある手段を爲とも右の金を調のへ來り一時も疾く我娘を救ひ出より外は詮なし、番場への氣の毒ながら今夜の急を救ひ難しと有警老劫分別疾く馳て其場を立去つ、然とも氣懸かればと土屋の邊を徘徊して密か其容を窺がひしは半介の母の亡なり惡漢吉に殺されて難題辛やく治りたりとの好便を得たりしかば由衛門大ひは安堵し僅ばかりの端銀を路用と遂に古郷高山へ歸り扱八方は周旋して金を得んと尽力したれと四五十兩へ調達せしが四百兩の大金へ逆も得がたく覺えしかば先年の負債の爲は永く逗留すべきはあられねば馳て江戸へ歸らんと思ふとき、圖らずも疾病は罹り或方へ止宿して爰も久しき月日を送り當年万延元三月の初旬、再び江戸へ出來りつ所用あつて麻布へ廻り夜も入て一本松の邊り近く來りしとき但みれば一人の女子ありて松の根方を堀起し何か埋め居る状況なるより、由衛門不審之れを何事なるかと小隠れて息を凝しつ良暫時其爲体くを窺ひ居たるが暗に紛れて心得かねしと

第五十五回

置説外木由衛門の古郷高山より江戸へ來り所用あつて麻布へ廻りて一本松の邊を過るゝ但みれば一人の女子ありて松の根方を掘起し何物あるか埋め居よと由衛門不思議と思ひて小隠しつゝ、良暫時其体爲くを窺がひ居たるゝ彼の斯ども心附ずや聽て之を埋め果て裾袂の塵打拂ひ、四下を見廻し埒を立出で足を疾めて一散芝浦の方へ走去しかば由衛門いよゝ怪しみ彼れ何を埋めたるか呪咀なぞとも見へざるゝ要こそわらめ見て遣べしと思ひ起しつゝ是も亦た四下よ心を配りつゝ、埒の中へ進み入て埋めし物を掘起し見れば小さき竹筒あるゆゑ筒の中よ指を入れて其中を探り見たるゝ半切の端よ書たる書附様の物いでたり、時よ宵暗の空くらけれを星の光よ透し見るゝ芝濱松町一丁目、家主源兵衛店、土屋たみ」と記しあるゝを由衛門大ひ驚るゝ

「然おもへば今の人ゝ舉動骨格をこそよくお民よ恰く似た女なりと腹の中よ思ひ居たるが扱果しておいでありしかハテ然よし心得がたきハ彼何故よ此書附を、此

處への埋めたる仔細あるべき事なるべし且ハ彼れ濱松町、云々と書たる下へ土屋たみト記せし番場より濱松町へと轉宅したるものなるか兎もわれ思ひ設けぬ事よて其居所を知り得たれば是より尋ね行たるうへ遇て萬事の話を開べし又此筒を埋めしハ何か要ある事なるべし元の如くよ爲て置んと且疑がひ且思ひ聽て伴んの竹筒を元の根方よ埋め置つゝ、南の方へと急ぎ行しハ最不思議ある奇遇ありけり、去程よ由衛門の只管途を急ぎしかば程なく芝浦通りへ出たり因て濱松町へ行き家主源兵衛の許よ就てお民が事を尋ねたるゝ立地ろよ知れたりしかば糸立を脱ぎ笠を除きて其家の門邊より徐々よ呼門進み入をお民ハ今方歸りし儘よ隣家よ預けし半葉を受とり行燈へ火を點し居たるが、火影よ信と此方を見て驚るゝこと大方あらむまアゝ何とお珍らしひ伯父さんでムひ升かサアお上ささひ升ト云ふ聲さへも口障しハ此頃の愛艱難と良人が家よ在らぬとの打續きたる歎きの數を語る人あき昨日今日、親よ均しき伯父よ遇て既や胸の中の迫りしあるべし、由衛門も老眼よお民の面を透し見て打



悦こふこと限りなく「やれ〜お無事で居たか扱めでたい事であつた、半介殿の奈
 が成された用達でも行れたかト問れて此方の堪りかね目を推拭つて聲を曇らせ「
 サア其良人の事成就て云云云れぬ仔細があつて只今家よ居ませぬが其仔細とヤ
 そのも鳥渡とのお話中させませぬ、先まアあがつて下さひ升ト云れて此方も何とな
 く胸の騒げと身の狂はず徐々々へ腰うちかけ草鞋を解すて塵打拂ふを傍よ寄つ、
 彼是と世話するお民が片手業よ、抱か、えたる半葉を見て(由)ヤ、お民手持よ成つ
 たか、チ、とれ〜ヤレ良子だ、男か女かウ〜笑うの主や出来したなト我子のこ
 と、譽られて足る親情、お民の思はず莞爾わらひ「ナニさ良子じやムひませんよ先達
 て生れたばかり漸々此頃赤色が脱て子供らしく成ましたト云つ、虎子引よせて小用
 を爲する股間を差覗き見て由衛門「チ、ちん〜だナ得來〜親父よ似て逞ましひ
 良容貌だ名の何と(お民)アイさ半葉とヤし升よ、それ半坊お伯父よ少し抱こト渡さ
 れて由衛門の長道の疲れも忘る、ばかり嬉しがり抱き取たる幼児を徐々抱えて復更

思ひ廻せ、我子のお七も、時代時節と云ながら並々よして世よあらば斯いふ子供も儲くる頃よ、ア、儘さらぬものあるかな可愛きもの此幼兒、不便なものアノお七ト思へば知らずハラ〜と流る、涙いだかる、半葉が顔は降注ぐを知らぬ赤兒の機嫌よくスヤ〜と睡る無煩惱、大人はづかしきばかりある此間よ、民の齟齬、立働らさて有合の酒肴を調のへつ、膳推据る折しもあれ増上寺の鐘間近く聞えて夜亥の刻とぞ成たりける

第五十六回

買あつて由衛門の「スヤ〜」と熟眠りし幼兒を、民へ渡し(由)エーと別れて尙やうやく、一年か半年だの何だか悉皆容子が變つた兎もあれ其方が顔色と云ひ、家内の越梅すべての内情とよやら念よ懸つてならぬ、サ、一通り話してくれよ聞してくれよト聞かけられお民の思ひも大息つさ(民)「サアお話し中をよも一通りや二通りの云々でいふひませんが先驚くりと落附てお聞なされて下さひました云ふも涙のチロ〜」

暫時く四下を見廻しつ、扱これより前々回の由衛門が知らぬ回を人のこと我のことに悲しき始末うれしき事がら憤怒のことに不審のことに危うき事と臨みしこと尙且半介が事のうへと逐電したる爲体くと遺書の趣むきと金のこと轉宅の事、惣て別後の事の仔細と昨日今日に至りしまで心勞の一五二十を餘さず漏さず物語り且言葉を変えて由衛門の又何故に彼折限り影を匿し今日まで何れへ潜み居たるか何故音信不通よ過しか又今夜の奈なる事より爰を知つて尋ね來しか不審よ堪すと一々よ語る事を語り了りて復問かへせし言葉の始終を由衛門聞もあへず殊のはかある凶變に驚くと大かたならず兩眼を見はり小膝を前ませ歎息しつ、目を推拭ひ(由)「世の物騒と云ながら今聞ても身の毛の立はと驚るいた事で有た、扱俺の又云々でト云を話の端切よ此身の馬道一條より一旦古郷へ歸りし事と其歸國せし事と久しき間だ疾病よ罹り辛やく近頃故郷を立て先のはと江戸へ着し一本松の邊りよて圖らぬも竹筒を堀出しお民が居所を知りたる事より尋ねて爰よ來りしまで乃ち前回の手續を物語り

且お七の葛城が事さへ彼此と云ひ出て時の移るも知らぬばかり互ひも積る話の敷々、云盡し語り盡せしかば由衛門首を傾ふけ「然いふ譯から半介殿も程なく歸るであらふけれど、相見ぬ中の苦勞なりト云ふお民の尙さら氣を揉み「程なく歸ると云ますけれど遺書の中にもある、一命有たら云々と文句が朝晩心は懸り實に寐も眠れぬはど心配で、右や左や取紛れツイお七さんも尋ねずト云を打消由衛門「如斯こと何でも宜が先兎も角も半介殿が歸つて來のを待て居て遇て始終の容子を聞き其上で何事も相談するより外に詮なし只管主が一命めでたく歸つて來のを神佛へ祈るが今の肝心だト慰さめ語る時しもあれ夜の深々と更渡りしかば、お民の辛やく心づき冷たる酒を暖ためつ、心ばかりの饗應は由衛門も懸念なく酒盃を重ね箸を取て暫時酒を飲過し餘談の翌日復語らんとて纏て枕に就たりと云ふ」扱此話の暫時く止めて爰又吉田半介の、櫻田の一義は狗死を爲すして事の果たるのち其場を立去り處々方々と身を匿し影を潜め居たりしが今に詮議も薄らぎしかば或時密か隠れ家

を出て久しく脱ぎぬ垢を去らんと本郷邊の湯に入て身体を清めつ、衣服を着んとて升際より到り我衣服を取出し我物として帯さへなく見おれぬ汚穢衣類あるより扱の盗み取られしか失機はけりと舌うちして暫時當惑して居たりしとぞ

第五十七回

實は禍害の貽める處る奈ある場所いかなる時日、奈ある物も有べき歟、圖り難きものあるか否然れば吉田半介の本郷邊の鐵湯にて我衣服を盗れたるが其品物の粗物あるゆゑ惜むべき物もあらねど右の衣類の仔細あつて奈なる人にも選されぬ心苦しき由ありけん心痛まると大方あらねど良あつて胸を叩き、ア、残念な事を爲たり然れども千度百度、後悔するとして詮なき事あり只此上の運命を天に任せて置より外おし嗚呼止まん、ト心の中は慨歎したる、半介の湯屋の主人が種々打謝て着更の衣類を出せしかば暫時貸たまへト挨拶し袖丈無揃の衣服を纏ひ纏て此家を走り出つ、隠れ家へ歸り來り是より久しく處々を経廻り盗まれた我衣類を只管索ね求めたれど

遂に得ること無ししかば、痛々益々嗟嘆したれを、今既や術計盡て此事の思ひ止まり
 つ斯て或時麻布へ到り例の松の根方を堀て鏝し合せし女房お民が、澗松町の宿所を尋
 ね夫婦親子叔姪一度に再會の企望を遂しかば、お民由備門大ひに悦び積る前後の
 話に涉りて凡そ十日餘りを經たるが半介の件に二人は胸中の秘事櫻田一義を、内密
 物語り且先こる或湯屋にて衣類を盗み取れし事をも話の序に語り聞せ、右様の譯
 なるゆゑ所詮在宅かなひ難し因て此身の云々の隠れ家も潜み居り時節を待て歸るべ
 けれは伯父御のそれまで爰に止まりお民母兒の後見たのむと懇切に相談せしかば二
 人の之を聞もあへず放しともなき情の爲れを強止をして禍害あらば却々悪かりな
 んと覺悟を極めて承知せしよと半介深く安堵して是より隠れ家も潜匿しつゝ、世の風
 聞も耳を立るも果して吉田半介なるもの、櫻田一義の餘類なりとて探偵厳しき趣む
 きなるより半介の扱こそと急ぎ江戸を立去りつゝ、お民への飛脚も托し特と離縁状を
 送り置つ、我の足は打任せて北陸地方を漫遊し或ひ人の食客と成り或ひの劍道

を教授して一年二年と月日を送り旅も貳年の年を経て、當年文久二年七月某の日、久
 しぶりよて江戸へ歸り外ながらお民一家の安危を探りたる處る別は異變なかりしか
 ば安心して我身の上の風聞を聞たるは曖昧として不定なれを尙お民が宿所へ致らず
 或夕風姿を變て例の佐野橋へ打登り葛城へ再會せしかば、葛城の夢の如く現の如く
 縋り着て幾年か相見ざりし恨み辛みの數かぎり泣つ口説つ果しなきまで思ふ程を語
 り尽し、又先月頃よりして片岡兵馬と云ふ武士が擯却をも一通ひ來りて遠からず
 身受せんと云こみの辛さ悲しさ其武士の日外ぬしが始めて爰に遊びしとき其晩登
 つた人よして先頃より見立替の有かた迷惑昨日今日悪くぞく齷りられ困り切て居
 ますトの話の容子は聞耳立たる、半介の良暫時うち案じて居たりしが忽地小膝を打
 鳴しナ、其武士こそ殊に依たら飛脚の金太が話に聞る我年來尋ね暮せし曲者なる哉
 も圖り難し若此次參つたら箇様な處るまで密かゝ知らせてくれられよ努々それ
 と知られぬやう心づけよ頼み置き扱これよく酒宴を設けて別後の始終と由衛門が



變りなく暮らして事な夜と共語り盡しつ後朝の別れ惜みもあへず嫌疑ある身の半介
 の急がひしく帯引しめ馳て佐野橋を歸り去しが斯りし後の事紛れて復當年の冬を
 も送り文久四年と成たる程吉原の仲の町へ正月初旬より梅を植附例の甘露梅（梅
 實漬の名）の準備するなど殊のほか賑ひしかば去年より打絶居たりし彼片岡と名
 告る武士より明夕の梅見を兼て身受來との多を持せ萬城が許へ使夫來りぬ、萬城
 の期したる事ゆる之を受て半介が隠れ家へ使夫を走らせ其事を知らせしかば半介は
 やく心を得て十二分の準備へ整のへ例の宗近の一刀を横佩、翌日の夕暮頃より吉原
 へ行き彼方此方と徘徊しつ、在ところへ件んの武士の斯とも知らず愆々として入來
 りしを枝生繁りし梅の影より右か左かと窺がひ居たるが今來りし武士を見るは是子
 年來遺恨ある彼團市平よて在しかば、半介の斯と見るより胸騒ぐまで打悦こびつ、
 暫時も措すツカ〜と進み寄さす市平が刀の鐙を右手に把り左手に蹴揚し装束を引
 あげ尻高〜と端折ながら二歩三歩マザ〜〜引戻しさま入代り破たと疾視で身

搦したりと畢竟半介此場於て首尾よく本意を遂るや否や尙次回又説續べし

第五十八回

然なきだも、物見だかきの都會の常どか況んや此の吉原の花の遊廓、俠客が鬼をも
 挫がん顔色しひの、武士を遮り止めつ、事ある可と見へたる程よ、往來のもの近
 所の者ともスハ喧嘩よト云より疾く八方より走集まりて件んの二人を取圍み遠巻よ
 して見物しつ己が種々ある評を立て一群頗ぶる驚々たれども、半介これを物とも爲
 ずして團市平を疾視つめ（半）今さら兎角を云ひすとも惣て汝れは覺えが有ふ、今日
 を番場の土徳が遺恨を晴す覺悟しる斯いふ我の土徳は由縁を結びし半介なり團市平
 準備せよハテ好處るで出遇たなト云ひれて彼方の胸頭へ打る、釘か鏢よべあげられ
 たる絶体絶命、今の迹とも脱さトと思ひよければ肚胸を決め（團）夢よさ知らぬ云が
 へり聞く耳の持あいが其方の世は聞えし理非を辨せぬ亂暴者ゆる、今奈ほどは辨解
 とも指を合へて引退まひ然らば無益の殺生なれと企望とあらば是非よ及ばず首を落



二百四十九



二百四十八

して此方が刀の利味試して遣ふか(半)扱々卑怯を其一言、事の遺恨の右のみならず
 我家を焼打され義弟駒吉を殺されたる、積る遺恨の覺えあり論の無益だキリ／＼
 て(團)ナニを下郎が武士へ對し返す／＼も不禮の云かけ覺悟を爲るト云もあへず紐
 引ちぎつて脱捨る彼袍と共身を開きて援放したる大刀を頭の上へ振擲し眞額臨ん
 で打て来るを、物々しやと半介も飛退ながら宗近の鞘を拂つて受流し流受しつ、切
 結びしが、市平の最初より隙もあらば脱れんものをと、思ふ心や有たりけん連りよ
 太刀を打込ながら七八合も及びしとさ刃を引て脱兎の如く大門口より一散も宙を飛
 で逃去りしかば、半介かくと見るが否や我も飛鳥の勢はひ烈しく驟然追かけゆき
 つ右も走り左りも走り裏田甫へと跳り出て、太郎稻荷の森蔭まで追迫りつ、及び腰
 よ刀尖さがり礮と切る拳の返り市平の脊筋を尻まで切さかれて斷時も堪らず仰むけ
 さまは撞と倒れて悶搔ところを半介の得たりとばかり飛薙りさま打下す鋭とき太刀
 風ふしながら受損たる市平の首をハッンと打落されて叫びも果す息絶たるまで、

第五十九回

半介辛く一息つき間近き清水は咽喉を漏はし四方を借と見渡せとも此邊の盞さへ淋
 しき況て今の全たく慕はて人足へ無りしかば僅かよ心を安んつて刃を納め死骸を
 隣返し思ふ限り罵しり噴つ、手足は點たる血液を拭ひ塵うち拂つて悠々と影を暗
 まし行んと爲たるが忽地、心附けん立戻りつ、市平が懐中を掻探りて取出したる胴
 巻の金高を計算るよ彼れ葛城を身受の爲か五百餘金所持してあるよぞ半介の胸の中
 へ「サト不快なる所業なれど此金の要用あるゆゑ我家と諸財産とを此奴も焼けた賠
 償も奪ひ取て行へきさき最早明日も知れざる一命、息ある中よ恩義を報ゆる、準
 備して置へきと今さら些細な小謹を守り居べき時よあらずト、思ひ決めて件んの金
 を懐中へ確かと納め足を疾めて東の方へと頬被りしつ糸遊の消るが如く走り去しど

扱前回の話談の暫時く措、爰、又、先年半介は殺されたる彼早稻田の吉が餘類は蛇
 の目の千太と云ふ者あり此奴も元來惡徒にして盜賊賭博を業としつ惡事掛つて然

る者なりしが斯て此蛇の目の千太ハ日外賭博まで大ひも失敗、甚はだしく困迫せしが其後の爲こと作こと一々も齟齬ひ兩三年來處々方々と徘徊して乞食と成り果、辛く一命を繋ぎ居たるが千太當年(文久四年)或日のこと兩國橋の橋間座して身の中の虱虫を潰し衣服の襟を彼方此方と打返して居たりしが不圖心づき襟を揉よ何やら中も物あるより不審ながら襟の縫目も指頭を挿入れて引綻きつゝ、更たむれば誰か之を縫込置けん短文の書翰が出たり、之の變なト打開きて讀んと爲れど一字も讀ねば舌打して書翰を引伸べ鼻を吐んと爲る處るを豫々かれを狙ひ居たりし捕手の壯俊兩三人、マラ〜と走り廻りて驚るき遠つる千太が背中を濃總の十手ふりあげ五ツ六ツ打ちめ蹴倒しあへず萬手小手も舞々と縛しめて件んの書翰も把揚つゝ、既に立ませひノ聲踏とも土地の番屋へ引揚たるより離れて巡廻の與力來りて一應千太の身元糺し又捕手が差出たる書翰を受とり讀下せしが讀も了らぬ大ひも驚るき、是の之れ先年三月櫻田見附の傍に於て井伊中將を擊奉まつりし悪徒より、悪徒へ宛て通牒し

たる書翰あること隠語あれども疑がひ無し扱ひ此乞食こそ容易ならぬ曲者なりソレ引打ひて惣ての事とも白状させよト焦燥に多捕手をも心得たりと右左りより立かゝりて縛しめられたる千太を引据、紙糾棒を振鬨して背尻の肉の碎くるばかりよハツ〜と打懲せしかば千太こらへず息も絶々(千)ア、少々お待くだせへ何も歎も中し上ノ〜ト泣叫べバ與力の點頭棒を止させ(與)ヨシ、然らば先尋ねるが其方何いふ次第が有て此手紙を所持して居た多(千)へイ其手紙の實の處る、襟の中へ這入て居たのを俺ちも今日まで知らず居ました(與)ナニ此手紙が襟の中へ、這入て居たと何いふ譯だ(千)何いふ譯だか存トませんが先刻兩國の橋の下で虱虫を驅ながら氣が附まして、襟を綻ひて見ましたら此手紙が出ました譯で(與)ム、然らば其衣服の其方新らしく拵らへたのか古着物でも買て來たのか(千)へイ此の衣服の或る古着屋で(與)買て來たと申すのか倍と然も違ひなひかモン偽りを申すと最後、直さま尻が割るが宜か、其時何くらひ痛い目も爲せなきやあらむ又其罪も重くなるが然



を覺悟で偽るなら偽りつて申しあげよ、サ、何トや其古着屋は何町の何邊で濃簾よ
 の何屋と有たか突合せやうサツサと申せト灸所を問れて此方のギツくり良暫時勘者
 居たるが思へば我身の罪科こそ數へ盡せぬ程なるよ此邊の事で餘れる罪を、塗匿さ
 るゝものならば却々よ僥倖なるゆる先云立て試みると狡猾の思案よ胸を決め(千)實
 は恐れ入りましたが此綿入の盗た物で、持ちへた物でいふいません(與)然らば何で盗
 んで来た又持土の何者だつた其邊が大事だ明瞭やせ(千)へ、此綿入の妙を譯で寤の
 處る一昨年中、本郷の湯屋へ参つたとき、俺ちが同類早稻田の吉が、仇敵の半介と
 か云ふ、悪い野郎よ出遇せたから、打つて遣ふと思つたが其半介とか云ふ奴は旦那
 衆も御存じだらふ、先頃番場で土徳と云ひ俠客を售た野郎だから怒つつか俺等風情
 が手出を爲たら反對よ打られ様と思ひ直し切て其腹冷よと其奴の衣類を板間かせぎ
 盗んで来たの此綿入、それから以來二年ばかり襟の中よ其手紙が這入て居たとも知
 らねへで昨今まで着て居た譯です、是より外にの塵はとも匿した事いふへやせん願

ろお悲慈は板間だけの御處分で済ますやうお斗ひを願ひます手紙の定て半介が總込で置ましたか其邊の一向存じませんから宜しくお願ひやし升トの思ひ懸なら白状を與力つら〜聞果て暫時勘考の体なりしが何か心は點頭けん、今日の右よて宜とて捕手共は指圖しつ、先の千太を引立させて傳馬助の穿舎へ送り我の件んの書翰を納めて時を移さず準備を整のへ町奉行の屋敷を指て只管急ぎ行しと云

第六十回

蟻穴元來小やかなれども、一度堤坊を洞ぬく時の遂は千尋の水を濁かし針の小なる物と雖ども過つて之を吏とさひ忽地人を斃すべし然れば人間世は處するのみち百般の事は注意せきん禍害眼下に起らんこと實は掌中を指より疾し況て吉田半介が如き脱れ難き男子の意地とて不容易ある事上加搦しつ其事の証據となるべき通謀の書を焼捨てして、彼奈なる心なりしか之を襟の中は貯へ秘藏したる處より圖らずも、其書悪徒の手は渡りて其事遂は公廳に聞に急ぎ半介を生捕との嚴命立地るよ下

りしかが都下邊界の差別なく幾千百の同心與力等、其他捕卒と稱せる者ども此嚴命を聞が否や我一番は彼を捕縛り功事を現せんと思ひ竜ひつ或ひは飴賣紙屑買と種々の姿装は變じて半介を捕へんとの手當一方ならざりしかが半介は隙れ家も居て此事を聞き打笑ひ「ア、然もあらん〜我首の櫻山事件は亡きふ可ものなりしかと、舅の仇敵市平をば撃てべんと思ふばかりは彼折の狗死せずして辛く虎口を脱れたり然るも先家圖らばも件んの仇敵を打逐せ且其後密ひやかまか民へも復讐一義を、内通して事済たれば今既や何までか役人共を腦ませべき疾く奉行所へ自首出て刑場の露と消へさなれど我幼年よして主家を脱走で父も母にも是と謂、孝義を尽せし事もなく況て累代大恩受たる主君へ對し奉つり忠義らしき事も爲す此儘空しく法廷へ拘れ縛り首を利られんこと、生前の恥辱死後の残念。之れは過たる物もなく君父へ對し參らせても怨れ多き限りなり、今熟々我邦を觀るよ朝廷幕府確執ありて遠からき日本國中、大動の起らんこと不日よ在んと思ふが故に希く我れ世よ在て其



騒亂の起りしとき第一番は主家へ歸參し君が馬前も戰死して年來重ねし不忠不孝の大罪の万分が一ツも補なれんと云ふ精神あれば脱る、だけハ脱れたく又一ツはアノ萬城、我昔年の些細ある恩義を思ひ身を捨て斯る遊里に沈み居ること不便の至り心苦し、幸ひ先頃市平を撃、夥多の金を奪ひたれば此金を以て彼を受出し身の落附を計畫て遣らすべ我も男子の甲斐なきあり、トハ思ふもの、昨日今日、出門も能ぬ日影の身なれば奈ある手術を廻らして彼を救ひ出すべき人傳よてハ物たらせハテ奈よせんト腕を組み首を低て良暫時く思ひ煩らひ居たりけるが信と心と思ひつく微妙の工風を得たりけん莞爾と笑つて小膝を打ち「昔しよりして有ふれたる墓なき双紙物語りよ有べく思ふ趣向されと今思ひ得し手術を以て兎も角も吉原まで紛れ入て萬城をバ受出す一事を果せべし然たト胸の中は分別辛やく決まりしかバ豫て心腹まで洞察おきたる我子分を兩三人 内密に招き寄せて件んの手段を相譚ふはと子分どもハ一議よ及ばず皆心得て市中を經廻り一番形の早桶と細引其他葬儀の器物を

悉ごとく買來りしよぞ、半介の金を用意し右早桶の内に入を子分が之を蓋を掩ひ細引を以て八重に纏げ其上は白布の袋の被を打かけつ、棒を通し花を挿添え亡者を寺へ送るが如く十二分は作り立て子分三人これを扛あげ然あらぬ体は立出つ、難なく吉原へ到り去かば土手の蔭の草叢にて扛卸して蓋を除き半介密と脱出て纏て葛城が許へ到り身の危険の轉末を搔振んで物語り彼市平より得たる處の五百兩の金を選し自から身脱の事を計れと云捨て早立あがるを葛城の堪りかねて暫時くど賣はり廻るを辛ふとて突除つ、土手下へ走り歸り、元の如く桶を匿れ其日の事なく歸りたるが半介の之は憤て其後右の如く封備ひお民が許と葛城が許へと、度々通ひ居たりしが斯と或日のこと町奉行の駒井相摸殿が此早桶と圖らざる摺れ違ひて何か心よ不審けん其行先を突止來よとて腹心の家來よ示せよ家來 心得みえ隠れよ右早桶の跡を跟て何處までもと暮し行しと

第六十一回

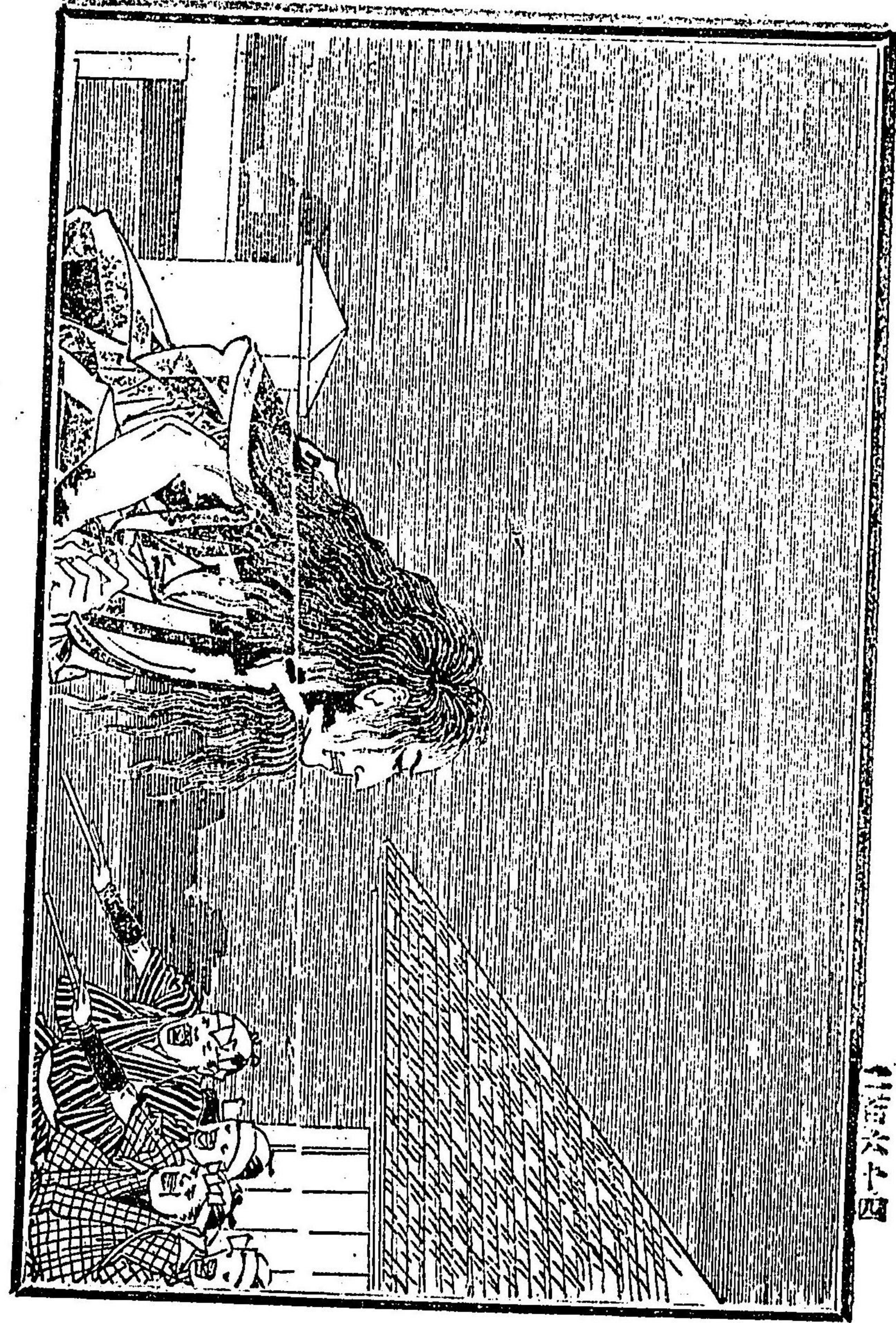
爰又葛城の圖らずも半介より五百兩の金を得て悦ぶこと大方あらず遂は横主佐野桶へ掛合ひ身脱の事を相談したるは葛城が此年來、眞持を以て勤めたるゆゑ佐野桶も是が爲に既に莫大の金を儲け且當時彼が身の借財も少々あるより何ぞ之を拒むべき最心よく受引て証文を返し其他萬端、見苦しからぬ様はからひしかば、葛城も感心して双方實情の感涙を溢し一夕ゆたか酒宴を設け留別の酒杯を廻らし樓婆若者惣ての者へも附渡り宜しく有て其翌日葛城の辛やく苦界を脱出つ、例の壯俊作藏は吩咐かねて買入置しと云ふ、永代向の河岸通り相川町の家に移りて先取あへ此事を半介へ知らせしかが半介も胸を撫で、ソレにて年來氣懸なりし一事を辛やく果したりとて悦ぶこと限りなく兎角するうち春も過て靈祭る七月の星合の天と成し頃をひ半介の久方ぶりよて葛城は會んと思ひ例の早桶は打乗つ、腹心の子分は扛れて今永代の袂まで來か、りたる折しもあれ、何れよりして集まり來よけん雲霞の如き衆多の捕吏等、橋の東西市街の口々、到らぬ隈もなきばかり群々と詰かけつ、

「吉田半介御用あるを神妙は繩を受ると云かけバラく走り寄や桶を扛たる子分二人を矢庭は打据縛りあげ又早桶は群がり蒐りて其儘捕んと葬めく處るを半介は桶の内にて事の始終を窺がい知りつゝ、絶て騒ぎたる氣色もなく例の金剛力を以て桶をバラりと突破り宗近の刀を左手は把つて、大喝一聲跳り出るは彼の當時有名の劍客、殊よの今ぞ一生懸命、覺悟を極めし顔色あるよを捕吏共アツと叫びて風は木の葉の散る如く皆七方へ逃開き手を下す者なかりしかば半介おもひす隙を得て裾を端折り袖を巻あげ手疾く準備を整へながら足場を揃つて大音あげ「捕吏の頭は何人なるぞ又いかなる罪あつて此方を召捕たまふを仔細を聞んと云せも果は捕吏の頭人進み出て擬勢の聲を振しばり「黙れ半介御用なるぞ、御用の筋を聞たくは法廷へ參つて承たまひれ、斯いふ場合は臨みては只神妙が緊要あるぞト云せもあへず冷笑ひ(半)日本古來の弊習よて人を捕へんと爲とさの其事柄も演聞せよ只管は壓制して理非も辨せず拘引ゆき腐れ番家は拘留して勿体なくも時の君の民安かれと布れたる宏愛仁慈

の法律を破り、濫りよ人を鞭撻して狂て冤罪は陥入しむるは是其方等が恒の事ありア、半介不肖あれども年來有志の輩徒と志念を相合せ壓制奸佞上を暗まし下を虐たげ世よ立て虎の威を借り己を肥せる、狐狸狗盗よも優りたる大奸物を誅戮して以て公廳を清めんと思ひ、千萬力を尽したれども運拙なくして遂は果さぬ今此場合は陥たること遺恨何事か之は過ん然れども阿容くんと手を束ねて縛り就き其方共が毒手よ死なんや、帯をる刀は宗近なり斯いふ我の吉田半介、今日より日頃の手術を顯はし太刀折れ力尽るまで思ふ存分働きくれんや奸物ども撃て斃れ、實我今の一言こそ三世を貫ぬく未來記よて我死して是より以後、幾百年の年を重ね幾十回の變更ありて世の今日と變るとも惣て奸徒等上よあらば愚民の之は壓仰され壯士の之が爲は斃れて國家の元氣衰退し敵國外寇これに乗じ上下安堵の時あからんこと、鏡よ懸て見るが如し其方共の斗筭の小人、其邊の大機は知るまじけれと熟耳底よ覺え居て要路の奴等へ傳言せよ、傳言せよト思ふ限り罵詈雑言を聞も了らぬ捕吏の頭人足踏な



二面六十五



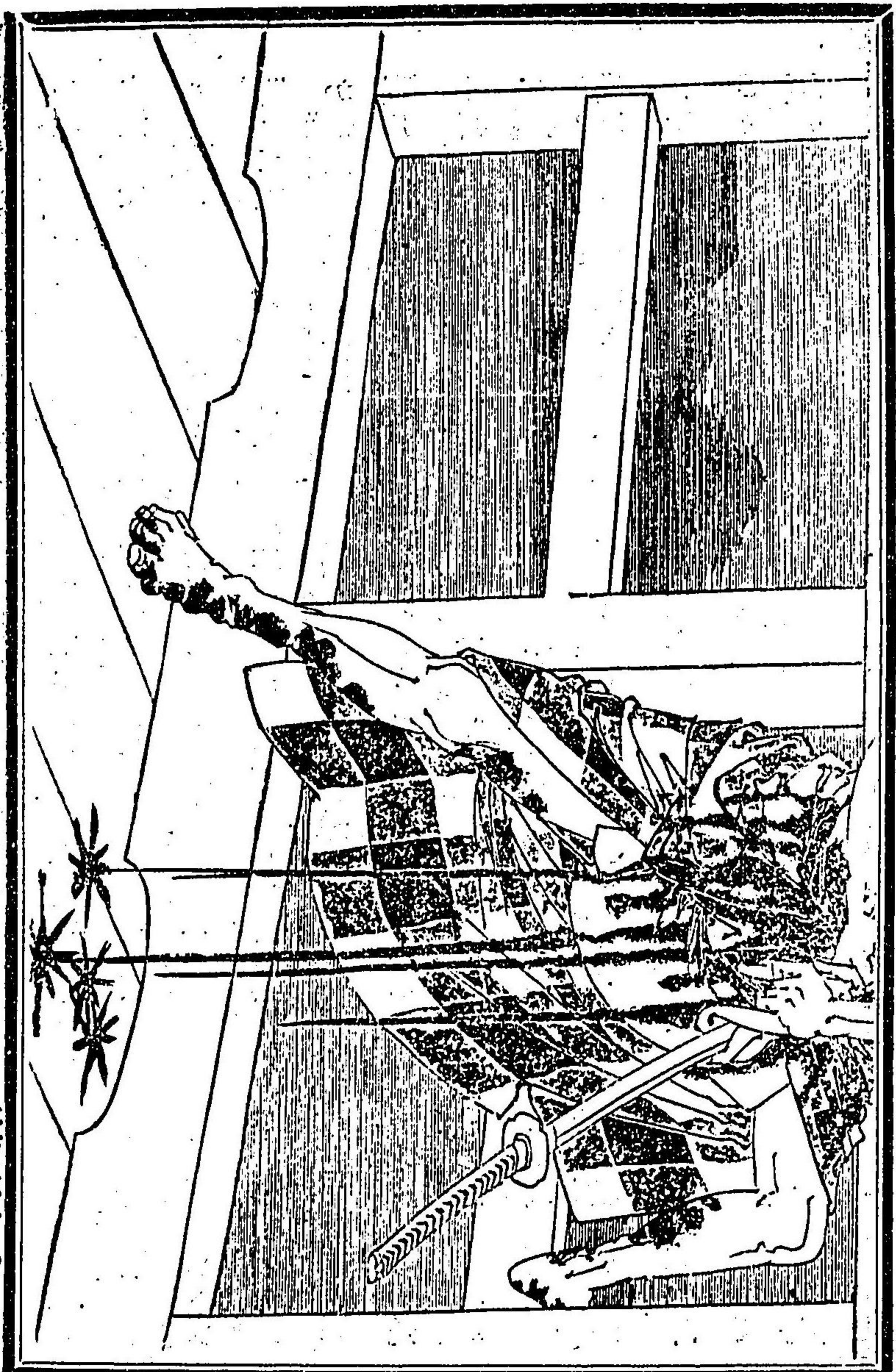
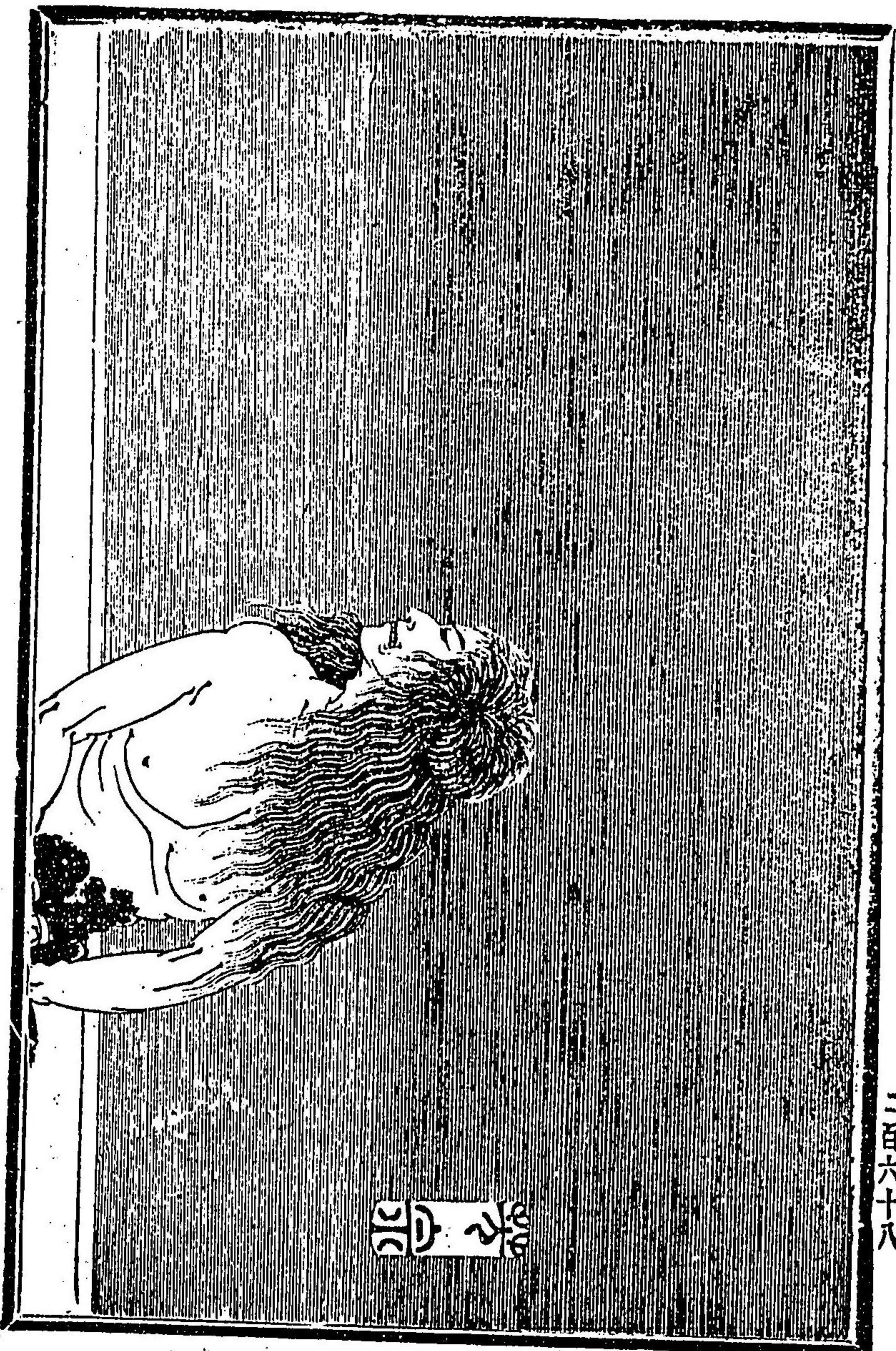
二面六十六

らし(頭人)小癩な宏言上へ對し恐れ多き次第なり其方過分の罪を犯し身の措處るよ切迫して早桶の中へ匿れ、密かよ市中を徘徊したれを明奉行の之を脱させ其早桶の扛ひ棒よ充分手澤の染たるの曲者ならんと見破られ、極密探偵残る方なく遂に爰に到りしあり、論の無益だソレ者をも召捕めされト聲を振のせ烈しく下知を傳ふる程に捕吏をも、今となり心憶せを詮方なさま多勢を憑み八方より御用の聲を力よして手よく十手ふり翳し脱ひ蒐れを擬勢のみ近づき難て見たりける

第六十一回

豪邁不屈雲霞よ齊しき、捕吏共を物とも爲ずして思入存分罵しつたる半介が大胆不敵よ物憤し捕吏共も容易よの進みかねて避易猶豫の体あるよ多捕吏の頭人何某等の腑甲斐なき事よ思ひ名々部下の捕卒を勵まし怒り罵詈下知せしかば捕卒も今の黙止がたさよ多勢を憑み擬勢を張て御用くと呼かけながら一方一時は半介へハラと撃て蒐るを待設けたる半介の足場を定めて宗近の太刀を眞頼は振鬨し遠て騒が

す呼吸を測り進退よろしく度を外さむ右を撃ち左を拂ひ前後に當りて良暫時く切まくり斬まくるよ刀の宗近撃手ハ劍客、太刀風鋭よく空撃なきよ多僅か一時三時よし撃る、者數を知らず事不容易よ見へたりしかば頭人共胆を冷し下知を傳へ人數を集め此上ハ只遠巻よして其勢はひの盡るを俟んと稻麻の如く竹葦の如く四方嚴重よ推取巻、衆目を注ぎ疾視つめつ、逃さずものどろ打目成たり、半介ハ一息ついて此爲体くを見廻しあがら太刀を拭つて冷笑ひ「鼠よ均しき者共を幾百人撃たりとて無益に殺生無駄骨なり、最早爰等で大概は年貢を納めて往生せんと決心しつ、永代橋の中央に進み行て復大音を振しばり「先刻拙者が演述したる言葉の趣むき逐一は熟要路の人よ傳え治國の道の大基とせよト云も了らず欄干へ足踏かけて宗近の双袖を卷添つ、左の肚へサと刺し徐々よ右へ引廻して纏て咽喉を撲切あへず俯伏よ臥て息たえたりとぞ實に維時文久四年六月某の日の事なりと云ふ」斯る處るへ東西より警護の捕吏の送ゆるをも、怖れず怯まば素足の儘よて狂氣の如く走來りしハお民



お七の兩人よて双方一時半介が血液は塗りし亡骸へ折重なり抱きつゝ物をも云
 ず泣伏たる折から多木由衛門も半葉を脊負て走來り此爲体くを見るが否や共音ア
 ツと泣を見て幼稚けれども半葉さへ父の手を把り足を撫で只テラ〜と徘徊つゝ泣
 叫びて賣ひる始末は捕吏共目注せして件人の四人は打向ひ其方共半介が由縁の者
 か他人なるか豈夫由縁の者あらば斯る處るへ踏込來り自から繩を受んとて此舉動の
 致すまじ他人あらば疾く立去れグツ〜して居て連累くふなト聲高は叱り退るは是
 ら其筋の内命は據り半介が遺族の者への別段の沙汰も爲すして其餘類の激動を密か
 ん押へんと心あるか特と言葉を曖昧よし之を去しめんと爲たれどもお民の更なり
 萬城も共よ言葉を打揃へ「イエ〜私しの半介の妻、民と申す者でムひ、私しも主が
 由縁の者よて何れも他人じやムりませぬ、願を半介が死骸諸とも、お連なされて下
 さりませト思ひ入て云ひ放を由衛門逃て、推止め、彼等二人の半介が遠縁の者で
 ムりませが昨今少々狂氣の氣味ゆえ何事を申すやら取止もなき申し條、何卒お聞免

第六十三回

し下され此儘お免し下されたくと云ふ捕吏等點頭て、然らば其方右兩人を召連て歸
 るべく又格別の義を以て上思し免あるも依り半介が鼻首を免し死骸は此儘其方ども
 へ下し賜ひりいほども謹しんで引取申せ但し葬式一切の相成らむと心得べく實も今
 日の沙計らひの古今無例の次第なれば其方ども有がたく思ひ尙心得違ひなきやう精
 々神妙緊要なりト幾度か告示しつ纏て衆多の捕手共の整々と爲て引揚ゆきしと
 當下外木由衛門の永代の橋上よて立腹切て終を遂たる半介が亡骸は、取着しまゝ
 泣入るお民とお七の萬城とを叱り勵まし辛やく涙を止めさせて我の四下を走廻り一
 挺の釣臺と兩人の人夫とを雇ひ來り、半介が死骸を扛せて濱松町の家へ歸るよお民
 お七も駕に乗て半葉を抱き之を附従ひ諸共歸り來りつ是よりして復た二時三時も
 返らぬ愚痴を云もしつ云れも爲つ、果しおきまで泣て口説き口説て、更打泣と
 と限りなきよ、由衛門も此爲体くは道理なりと思へども特と聲を振立て種々



叱り懲し遂に半介が亡骸を菩提所へ葬むり了り尋で跡々の事を圖るゝお民もお七も
 是限り尼も成んど云けるを之も由衛門推止めて心さへ尼も成れば強がち姿を變るゝ
 及びせと説諭し、先のお七へも我家を盡ませお民の家も同居させて只管半介が追善
 の爲め念佛の日を暮せたりしと、斯て後の別段に記すべき程の事もなく復幾十の月
 日を送りて世の中明治の御代と成しが是より先き由衛門の疾病は因て死亡なり尙月
 を積み年を累ねて半葉も既成人せしかば種々の事故も遭遇せしものち遂に東京へ移
 りすみ神田連雀町の邊に於て一の番双紙屋を開きし處に思ひの外に繁昌して母とお
 七とを養ふゝ不自由の不の字も知らず半葉のますゝ商賣を勤み後神田を去り芝
 へ移り呉服店を開きしが明治十五年の秋、相州横須賀へ引移り爰に熟々亡父の事を
 回顧して所感ありしか筭盤を捨て農歸し姓名惣てを一變して未だ妻を娶る事なく
 三人今も慕し居とる半介が墓の或人の説は本所の法恩寺に在よし又三吉と作藏との
 其終りを詳ひらかゝ爲す、次は本編の物語の最初より半介が無業手段を運用しけ

るを眼目として記すべし等ありし處る差支えの廉出來せしゆゑ不本意ながら右を省きて爰本傳を説納む但し其事と其遺族の明治代に渉るを以て之を明治俠客傳とす題したるなり焉

明治俠客傳終

柳葉亭繁彦編輯

○愉快々々 閨秀奇談

西洋綴美本
定價八十錢

實價十二錢

堀川陸太郎編輯

○白川樂翁公傳

西洋綴美本
定價廿五錢

實價廿錢

堀川陸太郎編輯

○明君白川夜話

近刻

堀川陸太郎編輯

○漂流曙日記

近刻

鈴木田正雄君序

堀川陸太郎編輯

○餘譚 浦和異聞

近刻

明治十九年十二月十一日出版御届
同 十二月 日出版

定價金一圓七十錢

編輯人

東京府平民

富田一 郎

東京芝橋區木挽町三丁目
十一番地

出版人

東京府平民

堀川陸太郎

東京芝區露月町八番地

發兌所

旭橋活版所

東京京橋區銀座三丁目

東京大賣捌所

日本橋區蛸壳町一丁目

信文堂

神田區淡路町一丁目

巖々堂

京橋區南鍋町一丁目

兎屋誠堂

日本橋區元大坂町

法木德兵衛

同 新設町十三番地

良明堂

同 通り一丁目

大倉孫兵衛

宮城縣牡鹿郡石之卷裏町

山口德之助

勢州四日市

伊藤善太郎

奥羽一手捌

勢州一手捌

